

鯛 之 迫 遺 跡

—広島市安佐南区安東所在—

2001

財団法人広島市文化財団

は し が き

広島市中心部の北西に位置する安佐南区の安川流域は、古くから交通路や農耕地として発展してきました。特に昭和30年代の広島市との合併後は、ベッドタウンとして最適な条件を備えていたことから、宅地開発が急速かつ大規模に進行しました。安田女子大学もこの時期に設立され、同地域における都市発展の一翼を担いました。今回、同大学用地内の造成工事を行う際、予定区域内の丘陵の尾根上で発見されたのが鯛之迫遺跡です。

調査の結果、竪穴住居跡を中心とした弥生時代後期から終末にかけての集落跡を確認しました。安川流域の北岸での当該時期の遺跡調査例は今日まで4例しかなかったため、今回この地域の、また広島市域での当時の生活や社会を復元するうえで、非常に貴重な資料を得ることができました。

この報告書が市民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、郷土の歴史や文化について少しでも理解を深める一助となれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査にあたって、ご指導・ご助言いただきました諸先生方、ならびに現地調査・整理作業にご協力いただきました関係機関・調査補助員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例 言

1. 本書は、広島市安佐南区安東六丁目における安田女子大学用地造成工事に伴い、平成12年度に実施した鯛之迫遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び本書作成は、大成建設株式会社広島支店から委託を受け、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課が実施した。
3. 本書の執筆・編集は、山脇一幸が実施した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、荒川正己、山脇、新本万里子が実施した。また遺物の実測及び図面の製図は、山脇・福原茂樹・岡野孝子が実施、写真撮影は荒川が実施した。
5. 本書に掲載した航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
6. 遺構内炭化材に関する分析調査は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 本書挿図に使用した方位は、第1・2図が真北、他が磁北である。
8. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地形図(広島)を複製したものである。第2図は、同発行の25,000分の1の広島市平面図(祇園)を複製したものである。
9. 本遺跡発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。
10. 本書に使用した遺構の略号は、次のとおりである。

SH：竪穴住居跡 SX：テラス状遺構 SK：土坑 P：ピット

目 次

I はじめに	1
II 位置と歴史的環境	4
III 遺構と遺物	7
IV ま と め	30

付 表 目 次

第1表 弥生土器出土遺物観察表	15
-----------------------	----

挿 図 目 次

第1図 鯛之迫遺跡周辺遺跡分布図	2
第2図 鯛之迫遺跡周辺の旧地形図	3
第3図 鯛之迫遺跡遺構配置図	6
第4図 S H 1・2 実測図	19
第5図 S H 3 実測図	20
第6図 S H 3 土器群出土状況実測図	21
第7図 S H 4・5 実測図	22
第8図 S X 1 実測図	23
第9図 S X 2 実測図	23
第10図 S X 3 実測図	24
第11図 S X 4 実測図	24
第12図 S K 1 実測図	25
第13図 S K 2 実測図	25
第14図 S K 3 実測図	25
第15図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(1)	26
第16図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(2)	27
第17図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(3)	28
第18図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(4)	29

図版目次

- | | | | |
|------|----------------------------|-------|--------------|
| 図版 1 | a 鯛之迫遺跡遠景(航空写真) | 図版 6 | a SX1(南から) |
| | b 鯛之迫遺跡(調査前)(航空写真) | | b SX2(西から) |
| 図版 2 | a 鯛之迫遺跡(調査後)(航空写真) | 図版 7 | a SX3(東から) |
| | b SH1・2(南から) | | b SX4(東から) |
| 図版 3 | a SH2 壁溝検出状況(南から) | 図版 8 | a SK1(西から) |
| | b SH3(北から) | | b SK2(南から) |
| 図版 4 | a SH3 内土器・炭化材出土状況
(北から) | | c SK3(東から) |
| | b SH3 内土器群出土状況(西から) | 図版 9 | 鯛之迫遺跡出土遺物(1) |
| 図版 5 | a SH4・5(南から) | 図版 10 | 鯛之迫遺跡出土遺物(2) |
| | b SH4 内炭化材出土状況(南から) | 図版 11 | 鯛之迫遺跡出土遺物(3) |
| | | 図版 12 | 鯛之迫遺跡出土遺物(4) |

I はじめに

広島市教育委員会（以下市教委とする）は、平成12年2月21日に、学校法人安田学園（以下安田学園とする）から安田女子大学用地の造成工事区域内における文化財等の有無及び取り扱いについて照会を受けた。市教委は同年3月に試掘調査を実施し、当該区域内に遺跡が存在することを確認し、3月28日に安田学園に対してこの旨を回答した。このため、事業主体である安田学園と遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、計画の変更は困難であることから、記録保存の措置を講ずることとなった。

これを受けて、安田学園は造成工事委託先である大成建設株式会社広島支店を介して、平成12年4月3日付で、財団法人広島市文化財団に発掘調査の実施を依頼し、財団法人広島市文化財団では、現地調査を平成12年4月27日から7月21日にかけて実施した。

調査の関係者は下記のとおりである。

調査委託者 大成建設株式会社広島支店

調査主体 財団法人広島市文化財団

調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

調査関係者 竹本 輝男 常務理事

堂官 正昭 文化科学部長

石田 彰紀 文化財課長

若島 一則 文化財課主任指導主事

調査者 荒川 正己 文化財課学芸員

山脇 一幸 文化財課学芸員

調査補助員(50音順)

天野千敏 榎康 岡真由美 岡原龍子 岡本真澄 小川久美子

加藤美智子 国本義春 新本万里子 田中孝雄 長力初江

堂山君枝 中田謙次 広田武子 藤井フジ子 本田春子

増崎千恵子 森川ミヨ子 山根順子

整理作業員(50音順)

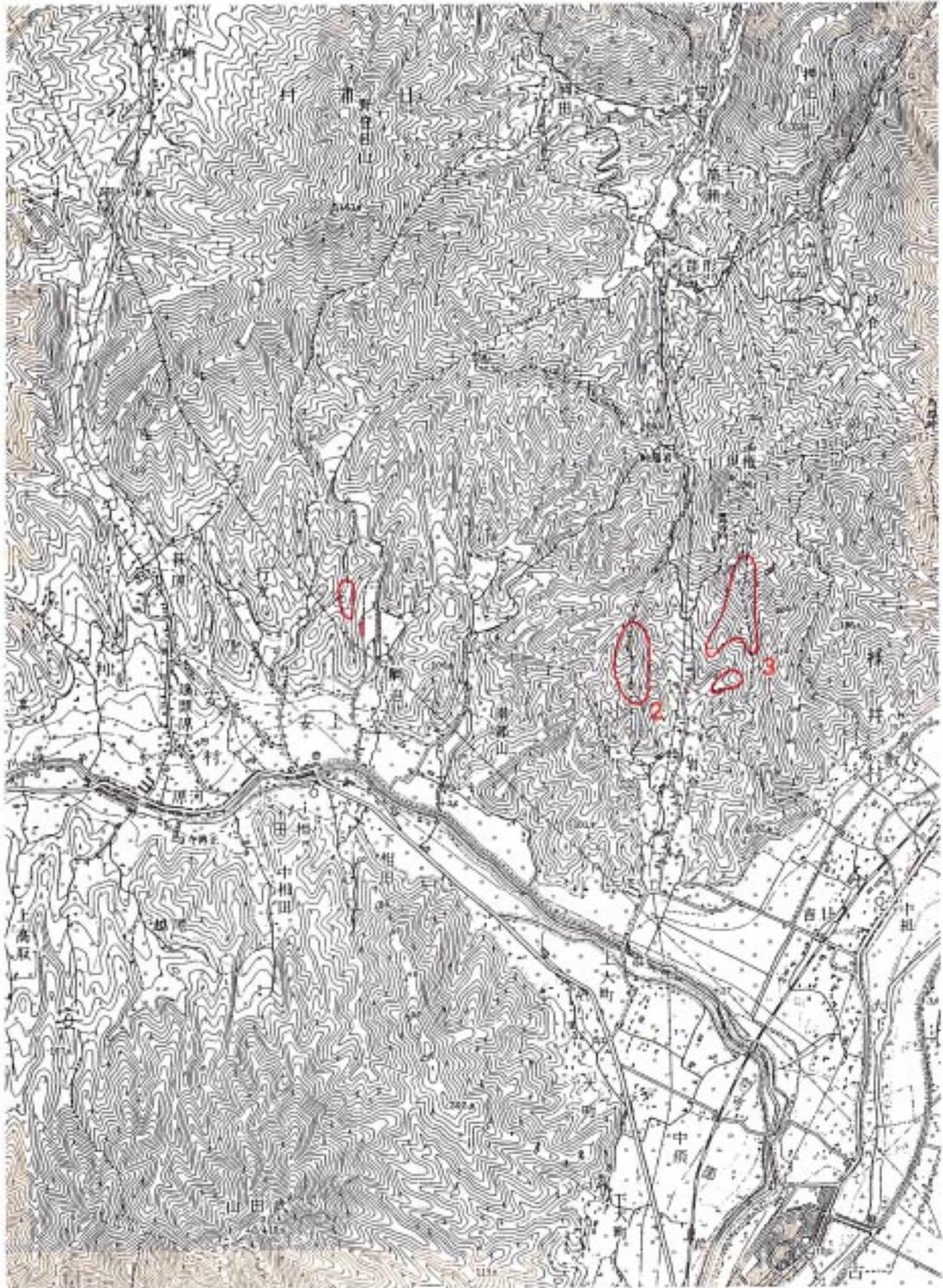
酒本由理郁 菅原彰子 住川香代子 橋本礼子

なお、学校法人安田学園、大成建設株式会社広島支店、広島市教育委員会の方々をはじめ多くの方々から、多大な御配慮、御援助をいただいた。また、調査期間中及び報告書作成にあたり、当財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会の委員である広島大学名誉教授潮見浩先生、広島大学文学部教授川越哲志先生、同教授河瀬正利先生、同助教授古瀬清秀先生から貴重な御指導、御助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



1. 鯛之迫遺跡 2. 中畦遺跡 3. 毘沙門台遺跡 4. 毘沙門台東遺跡
5. 巢取遺跡 6. 恵木遺跡 7. 細坂遺跡 8. 観音山遺跡 9. 岡崎神社裏遺跡
10. 国重城跡遺跡 11. 大町矢ヶ谷遺跡 12. 大町七九谷遺跡群
13. 広島経済大学構内遺跡群 (大谷遺跡・長う子遺跡・芳ヶ谷遺跡)
14. 寺山遺跡 15. 池の内遺跡 16. 九郎杖遺跡

第1図 鯛之迫遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)



1. 鯛之迫遺跡 2. 毘沙門台遺跡 3. 毘沙門台東遺跡

第2図 鯛之迫遺跡周辺の旧地形図（大正14年測量）（S = 1 : 25,000）

Ⅱ 位置と歴史的環境

鯛之迫遺跡は、広島市安佐南区安東六丁目に所在する。

広島市は、中四国地方最大の都市で、広島県南西部に位置する。その中心である市街地は、市域最大の河川である太田川によって育まれた三角州上に広がっている。広島県北部の中国山地を源としている太田川は、市北部の安佐北区可部町で、北から根の谷川、東から三篠川と合流した後、東南方向に市を縦断するように流れている。その太田川に西から合流する支流の安川は、旧沼田町伴奥畑を水源として南東方向に流れ、まず古川と合流した後に西原で太田川と接続する。この流域は南は武田山(410.9m)、北は荒谷山(631.3m)、野登呂山(453m)、権現山(397m)を中心とした山々が迫っており、これらの山々から流れ出る荒谷川や細坂川等の小河川が安川に向かって流れ込むことによって、ほぼ南北に向いた多くの小河谷や緩やかに細くのびるナマコ形の低丘陵が形成されている。本遺跡も野登呂山(清寺山)から南に派生するこのような低丘陵上の標高100～108m付近に位置し、丘陵東側には湧水地が存在しており、小河川が安川に向かって流れ、周辺には水田が開けていた。

現在本遺跡を含む丘陵は、安田女子大学や団地の造成によって地形が大きく改変されてしまい、遺跡は一見独立した小丘陵上に位置する様相を呈している。しかしながら、大正14年測量の地形図によると、本遺跡は本来野登呂山の山脚からさらに南西へと派生して下った後、S字状に南へと向きを変え、安川に向かってゆっくりと下降する丘陵尾根の中腹部にあった。

さて、安川流域を中心に弥生時代の集落遺跡を見てみると、弥生時代中期に属する遺跡としては、唯一細坂遺跡¹⁾において磨製石斧が単独で出土したのみで、集落跡等は確認されていない。後期の遺跡としては、安川北岸地域では毘沙門台遺跡²⁾、毘沙門台東遺跡³⁾をはじめとして、中畦遺跡⁴⁾、巢取遺跡⁵⁾が、南岸地域では恵木遺跡⁶⁾、国重城跡遺跡⁷⁾があげられる。毘沙門台遺跡・毘沙門台東遺跡は安川最下流にあたり権現山から南にのびる尾根上に位置し、毘沙門台東遺跡では広島市域最大の規模となる竪穴住居跡70軒や土坑180基等が、毘沙門台東遺跡では竪穴住居跡49軒や土坑111基が確認された。中畦遺跡は安川中流域にあたり荒谷山から南にのびる標高約164mの尾根上に位置し、竪穴住居跡2軒や土坑10基が確認された。巢取遺跡は中畦遺跡と同一丘陵上で、南東に約100m下った標高約68mに位置し、土坑2基が確認された。また南岸地域の恵木遺跡は、中畦遺跡や巢取遺跡と安川を挟んで対岸の武田山から北にのびる丘陵上に位置し、竪穴住居跡2軒や土櫃墓12基等が確認された。国重城跡遺跡は安川流域で調査された遺跡のうち最も上流に位置し、武田山から北にのびる丘陵上にあり、竪穴住居跡2軒が確認された。また、広島市教育委員会の試掘調査によって時期は不明であるが集落跡と考えられる岡崎神社裏遺跡や観音山遺跡が確認されている。

ところで、本遺跡が所在する安佐南区は、市街地の北西に隣接して位置することから、広島市に合併する以前からベッドタウンとして宅地造成が進められてきた。特に遺跡が位置する安川に向かって緩やかに伸びる山の尾根は、宅地開発にとって絶好の土地環境のため宅地化が急ピッチで行われた。しかし、時代的な状況等から埋蔵文化財、特に集落跡の確認・調査はほとんど実施されて

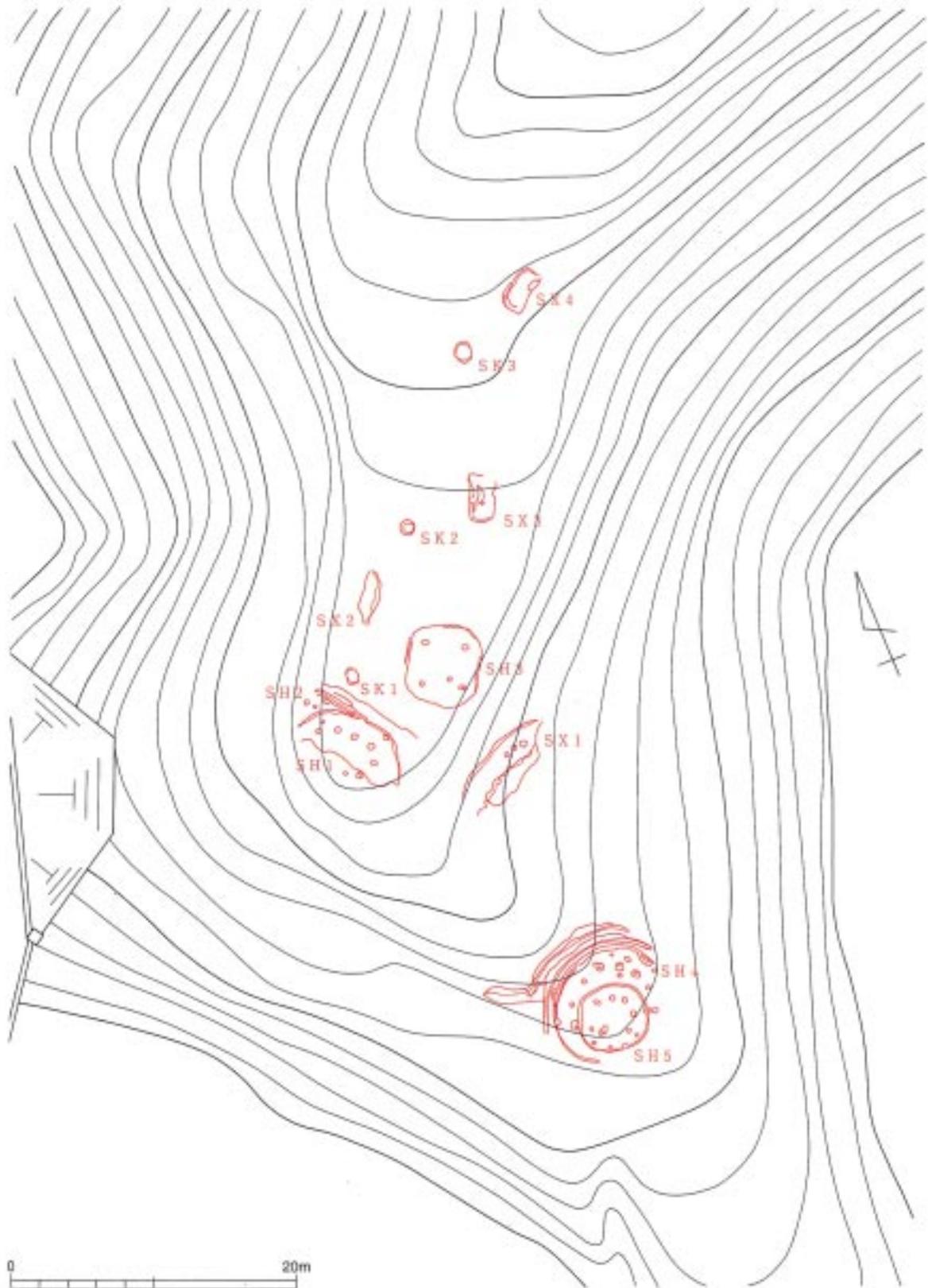
いない。このため安川流域で弥生時代の遺跡の発掘調査が行われているのは前述のように6例と少なく、本来の状況等は明らかではない。

そこで、弥生時代後期の集落跡が多数確認されている広島市域中心部を流れる太田川下流域や西部の八幡川・石内川流域を例に広島市域の弥生時代後期の状況をまとめると以下のとおりとなる。遺跡はおもに低丘陵上に営まれているが、これは度々洪水を繰り返す太田川等の主要な河川の流域が農業用地に適さず、支流が形成する小扇状地の末端や小河谷の狭い平地を農業用地として利用するため、集落は付近の丘陵尾根上に設けられたものと考えられている。また、これらの集落跡は存続期間と遺構数から、①1～数軒の住居が一時期にのみ形成されたもの、②十数軒以上の住居跡を持ち、弥生時代中期終末、もしくは上深川Ⅰ式から始まり上深川Ⅲ式⁸⁾、まで存続するものにと大きく分けることができる。この2種類の集落跡は、主要な河川の小支流ごとに、中心となる集落と、そこから派生・分村した小規模集落との関係にあると捉える考え方があ

る。このことを安川流域に当てはめると、前者には上深川Ⅰ式の時期に恵木遺跡、中畦遺跡が、上深川Ⅱ式の時期には中畦遺跡が、上深川Ⅲ式の時期には国重城跡遺跡がそれぞれ属すると考えられている。一方、後者に属する集落跡として毘沙門台遺跡・毘沙門台東遺跡が考えられるが、これらの遺跡は、それぞれ竪穴住居跡70軒・土坑180基、竪穴住居跡49軒・土坑111基と市域の他の中心的な集落の規模と比較するとそれよりもはるかに上回っている。このため、主要な河川の小支流ごとの中心的集落とは考えにくい。つまり安川流域では太田川や八幡川・石内川に見られるような小支流ごとの中心的集落である遺跡はこれまでのところ確認されていないのである。また、前述の毘沙門台遺跡・毘沙門台東遺跡は、特に大規模な集落跡で市域を代表する拠点的な集落と考えられ注目されているが、現在まで安川流域の集落跡の確認・調査事例が少ないため、これらの遺跡をとりまく当時の状況の復元と検証を十分に行うことができなかったのである。

注

1. 広島市『沼田町史』1980年
2. 未報告のため詳細は不明である。
3. 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』1990年
4. 広島市教育委員会『中畦遺跡発掘調査報告』1984年
5. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『巢取遺跡発掘調査報告』1998年
6. 恵木遺跡発掘調査団『恵木遺跡発掘調査報告』1982年
7. 広島市教育委員会『国重城跡発掘調査報告』1982年
8. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線道路改良事業地内遺跡群発掘調査報告』1988年



第 3 図 鯛之迫遺跡遺構配置図 (S = 1 : 400)

Ⅲ 遺構と遺物

1. 調査の概要

本遺跡は野登呂山の南側に延びる山脚から派生した尾根筋の一つに位置する。本遺跡が立地する標高100～108mの低丘陵は、周囲を住宅団地及び安田女子大学の造成によって削平されており、一見独立丘陵を呈している。しかしながら、大正14年測量の地形図によると、本来野登呂山の山脚からさらに南西へと派生して下った後、S字状に南へと向きを変え、安川に向かって下降する丘陵尾根の中腹部にあたる。本遺跡は南に「く」の字状に延びる丘陵のうち、最高所から南に高さ約5m下った地点から尾根筋の南側を発掘調査範囲として設定しており、範囲内には南北2つの平坦面がある。このうち北側平坦面は、南に延びた舌状を呈しており長さ約50m幅約20mある。南側平坦面は、北側平坦面の南東端から南東へと延びる長さ約25m幅約20mの平坦面で、北側平坦面より約5m低い。

調査の結果、竪穴住居跡5軒(SH1～5・焼失住居2軒含む)、テラス状遺構4ヶ所(SX1～4)、土坑3基(SK1～3)をそれぞれ確認した。また遺物は、弥生土器・石器(砥石・磨り石・石錘)・鉄器(鋤)・青銅器(鋤)が出土した。

2. 遺構

・SH1/SH2 (第4図)

SH1は、北側平坦面の南西端に位置し斜面を掘り込んで造られている。南半分は斜面のため流失している。床面残存部の最大幅は東西約800cm、奥行きは334cm、最高所は標高102.28m、壁高は最大45cm、壁溝は西辺のみ遺存しており幅約10cm深さ3～6cmである。床面からは11個のピットを確認した。このうち底面直径約24～28cm、底面の標高約101.50m、深さ約65cmの規模を同じくするP1～P5が支柱穴と思われる。配置はほぼ半円形で、隣り合う柱との間隔は約130cmである。これをもとに復元すれば、10本の柱が推定でき、遺存部分から推定される平面形状は円形である。その他のP6～P11は底径10～16cm深さ12～36cm程の小規模なピットで、支柱穴と壁面との間に位置していることから、上屋構造を支える補助的な施設のためのものと考えられる。なお、本住居跡埋土中からは弥生土器(1)が出土した。その形態から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

SH2は、SH1の西半分と床面の約1/2が重複するように位置している。南側及び西側は斜面のため流失している。住居北側に明確な壁溝が遺存しており、SH1の埋土中にもこれに続く溝が逆L字状に確認できた。このため、本住居跡の平面形状は隅丸の方形もしくは長方形と推定できる。確認した床面は幅約350cm、奥行き約280cm、遺存する床面の最高所は標高102.56mで、SH1の床面より約20cm高い。壁高は最大24.4cm、壁溝は残存部の長さ約415cm幅約20～30cm

深さ約16cmである。なお、床面及び住居跡の周辺において支柱穴と考えられるピットが確認できなかったことから、支柱穴を持たない住居であった可能性が高い。

ところで、前述のように本住居跡とSH1は切り合っているが、土層断面の観察から、SH1が先行する。

本住居跡の埋土中からは弥生土器(2)が出土した。その形態から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

・SH3(第5図)

SH3はSH1の北東約3.3mに位置する。上部は著しく削平されていたが、壁溝と床面・柱穴はほぼ完存していた。平面形状は南北に僅かに長い六角形で、規模は東西約460cm南北約540cmである。床面の最高所は標高103.61mである。壁高は最大26cm、壁溝は床面の北東側を除くほぼ全周で遺存しており、幅10～20cm深さ6～14cmである。床面から確認したピットのうち、規模及び壁との位置関係からP1～P4が支柱穴である4本柱の住居と考えられる。規模は底面直径20～30cm、深さは70～82cmで、柱間距離は南北間が280～300cm、東西間が280cmである。その他のP5～P9は、底径6～20cm深さ13～22cmの小規模なピットで、支柱穴と壁面との間に位置することから上屋構造を支える補助的な施設のためのものと考えられる。また、壁溝内からは壁面の土留め用の施設に関するものと思われる小規模なピット14個を確認した。なお、支柱穴P1・P3・P4の底面が2ヶ所あることから少なくとも1回の建て直しが行われていた。

さて、本住居跡の床面直上からは多数の炭化材及び焼土が出土し、焼失住居と考えられる。炭化材は、おもに本住居跡の北半分から集中して出土している。また土層断面の観察では、北側の壁から南へ約1.5mの位置に、床面直上の炭化材を含む層と同レベルに厚さ最大15cmの焼土層が堆積していた。さらに、焼土層の南東側から、一辺約17cm厚さ約3cmの上面が被熱により赤変している板状の石も検出した。一方で、住居内の他の場所から出土した石には火を受けた痕跡が認められなかったこととあわせて考えれば、北半分で火災が発生したが南半分に火がまわる前に鎮火された可能性が高い。また、本住居跡から、砥石及び弥生土器(3～5, 7～8)、コシキ形土器1点(6)がそれぞれ破片が散らばることなく出土している。このことは、本住居の火災が不慮のもので日常使用していた状態のまま土器を持ち出すことができなかった状況を示しているものととらえることができよう。

以上から、これらの土器は火災の直前の位置関係をほぼ保っているものと見ることができる。ところで、これらの土器の中には使用方法が不明なコシキ形土器が含まれていた。そこで出土状況を詳細に検討してみることにする。コシキ形土器は住居内中央からやや東寄りの位置で、器形の小さくすぼまる方(以下上端部)を南東方向に向けた状態で出土した。このコシキ形土器から西に約40cmの位置に、甕(3)が口縁をコシキ形土器の上端部の向きとほぼ平行である南東方向に向け横倒しの状態で出土した。これら2点の土器のほぼ中間に位置して椀(5)が、口縁を南西方向に向けた状態で出土した。また、椀の目縁の向きの延長線上にはもう一点の甕(4)が確認されて

いる。この甕の目縁は北側に向けた状態だった。これらの土器は、いずれも狭い範囲に密集して出土している。この出土状況から、土器群は住居焼失時に高い位置から落下したとは考えにくく、地面に置かれたものが倒れ、つぶれたものと推定できる。特に甕(3)を見ると、押し潰され重なり合った口縁の下部の方が上部よりも若干飛び出ていることから、口縁部を上向きにしていたものが、南東に向けて倒れたことを示している。このことから、他の土器も同様の向きに倒れた可能性が高い。この場合、コシキ形土器は上端部を上向きにしていたものと推定できる。

以上のことから、これら土器群は住居内中央寄りに立てた状態で整然と並べて置かれていたと考えられる。そして不慮の火事に遭遇し、火がまわり土器を持ち出すことができず、住居の柱材若しくは梁材が焼けて崩れ落ちたことにより、土器は下敷きになり倒壊してしまったと推定できる。おそらく家の中心で使用している状況ではなく、収納している状況であったことがいえよう。

なお炭化材は科学分析の結果、樹種の大半がブナ科クリ属のクリで、その他ブナ科シイノキ属のスダジイ、ツブラジイ、ツバキ科サカキ属のサカキが若干用いられていた。

これら弥生土器は、いずれもその形態から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

・SH4／SH5(第7図)

SH4／SH5は重複し南側平坦面北端に位置する。

SH4は、壁面の南から南東部にかけて一部削平されている。平面形状は歪な長円形で、長径は約810cm、短径は約750cm、床面の最高所は標高96.3m、壁高は最大38cm、壁溝は北辺のみ遺存しており、幅約14cm深さ1～5cmである。床面からは17個のピットを確認した。このうち規模と位置からいずれも底面直径18～26cm、底面の標高約95.15～95.37mであるP1～P12が主柱穴と思われる。配置は楕円形で、隣り合う柱との間隔はP1－P2／P7－P8が190cmと広く、その他は110～160cmである。間隔の広いP1－P2／P7－P8を結んだプランはほぼ長方形となり、他の柱穴がその間にほぼ等間隔に位置することから、P1・P2・P7・P8が本住居跡の上屋構造を作る上での基準的役割の柱だったと考えられる。その他のP13～P17は、底径14～26cm深さ18～28cmの小規模なピットで、主柱穴と壁面との間に位置することから、上屋構造を支える補助的な施設と考えられる。また、壁溝内からは壁面の土留め用の施設に関するものと思われる小規模なピット5個を確認した。

本住居跡北側に接して住居を半周する同心三日月状平坦面が上下二段造られている。現状の規模で下段平坦面は幅20～40cm長さ約1140cm、平坦面の最高所は標高96.36m、SH4床面との比高は約40cmである。上段平坦面は幅28～48cm長さ約860cm、平坦面の最高所は標高97.06mで下段平坦面との比高は約60cmである。下段平坦面の壁際に沿って幅10～20cm深さ3～8cmの溝を検出した。これら平坦面は斜面際にSH4が作られているため、壁の高さを揃える目的と、平坦面のほぼ中央を最高所に両端が下がっていることから、住居内に水が流れ込まないための排水の目的をもった施設と考えられる。

ところで、下段平坦面の南西部と、本住居跡の上屋構造を作る上での基準的役割と考えられる主柱穴P1－P2／P7－P8を結んだ長方形の長軸(N43°W)の延長線がほぼ交わる位置に、幅

約40cm奥行き約30cm、床面から約7cmの高さに半円形の段が掘り込まれていた。さらにその延長線上、上段平坦面が終息する位置から住居の外へと延びる長辺約350cm×短辺約60cmの平坦面を確認した。その性格を確認できず不明であるが住居跡の構造と位置関係から、前者は住居の出入り口に伴う階段的施設、後者は住居への通路機能を持つ施設の可能性があると考えられる。但し、住居跡周辺の地形を見ると疑問が残る。

さて、本住居跡北西部の床面からは炭化材を多量に含む層や多数の炭化材が集中して出土し、焼失住居と考えられる。炭化材のほとんどは、径10～18cm程度の丸太状である。出土状況から垂木に用いられた材と考えられる。これらの炭化材については科学分析を実施している。科学分析の結果、樹種はブナ科クリ属のクリを中心にブナ科シノキ属のスダジイ、ミカン科イヌザンショウ属のカラスザンショウが用いられている。垂木にはクリが用いられ、その他の細かな材にはクリやスダジイ、カラスザンショウが用いられている。

なお、本住居跡床面上からは弥生土器(13～22)が出土している。その形態から上深川Ⅰ式に属すると考えられる。

S H 5はS H 4の床面中央南寄りに位置する。平面形状は隅丸方形で、規模は一辺約440cmである。床面の最高所は標高95.75mでS H 4の床面よりも約30cm低い。壁高は土層断面の観察から最大75cmであったと考えられる。壁溝は床面の北辺のみ遺存しており、幅10～15cm深さ2～5cmである。床面からは16個のピットを確認したが、このうち規模及び壁との位置からP 1～P 4が支柱穴と考えられる4本柱の住居である。いずれも、規模は底面直径20cm、深さは36～59cmである。柱間距離は南北間が210～230cm、東西間が180～190cmである。また、壁溝内からは壁面の土留め用の施設に関するものと思われる小規模なピット21個を確認した。なお、支柱穴P 1・P 2・P 4の底面が2ヶ所あることから少なくとも1回の建て直しが行われていた可能性が考えられる。

ところで、前述のように本住居跡とSH4は切り合っているが、土層断面の観察から、S H 4が先行する。

本住居跡の床面上からは弥生土器(32)及び鉄鏝が、埋土中からは砥石及び弥生土器(33)が出土した。土器は、その形態から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

・S X 1(第8図)

S X 1はS H 1の東約3.3mに位置している。尾根筋に直交して斜面を掘り込んで造成されており、規模は幅830cm奥行き310cmである。主要な平坦面は現状で上下二段に分かれており、上段の平坦面の最高所は標高102.31m、下段の平坦面の最高所は標高101.96mである。壁高は最大34cmである。平坦面からは、規模や深さから柱穴と考えられるP 1～P 3を確認した。規模はいずれも底面直径18～28cm、底面標高101.68～101.83mである。また、上段平坦面の北隅壁際で長辺50cm×短辺22cmの焼土面を確認した。床面上で火を焚いた炉跡と考えられる。

なお、それぞれの平坦面の新旧関係について確認することはできなかった。

本遺構からは、砥石及び弥生土器（38）が出土した。土器は、形状から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

・ S X 2（第9図）

S X 2はS H 3の西約4 mに位置している。尾根筋に平行して斜面を掘り込んで造られており、規模は幅386cm奥行き124cmである。平坦面の最高所は標高103.06 mである。壁高は最大42cmである。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

・ S X 3（第10図）

S X 3はS H 3の北東約7.7 mに位置している。尾根筋に平行して斜面を掘り込んで造られており、規模は幅330cm奥行き170cmである。平坦面の最高所は標高103.56 mである。壁高は最大25cmである。

平坦面からは、規模や深さから柱穴と考えられるピット1個を確認した。規模は底面直径17cm、底面標高103.21 mである。また、平坦面の南東隅で長径128cm×短径80cmの楕円形を呈した炭化物を含んだ層を確認した。床面上で火を焚いたものと考えられる。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

・ S X 4（第11図）

S X 4はS K 3の北東約11.7mに位置している。尾根筋に平行して斜面を掘り込んで造られており、規模は幅310cm奥行き172cmである。主要な平坦面の最高所は標高104.99 mである。壁高は最大60cmである。また、平坦面の北東隅に幅約88cm奥行き約40cm深さ約6.8cmの小規模の掘り込みを確認した。用途としては不明である。

本遺構の小規模な掘り込み内から、弥生土器（35）が出土した。土器は形状から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

・ S K 1（第12図）

S K 1はS H 2の北東約2 mに位置している。平面形態はやや不整形の隅丸方形である。底面の規模は長辺122cm×短辺107cm、深さは約45cmで底面の標高は102.82 mである。その形状から貯蔵穴と思われる。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

・ S K 2（第13図）

S K 2はS H 3の北約6.4 mに位置している。平面形態はやや歪な円形である。底面の規模は長径100cm×短径92cm、深さは約52cmで底面の標高は103.20 mである。断面形状はすり鉢状を呈し、

その形状から貯蔵穴と思われる。

本遺構埋土中からは、弥生土器（40・41）が出土した。形状から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

・SK3（第14図）

SK3はSH3の北約18.7mに位置している。平面形態は歪な長円形である。底面の規模は長径182cm×短径159cm、深さは約104cmで底面の標高は103.74mである。断面形状は若干袋状を呈し、その形状から貯蔵穴と思われる。また、底面中央に底面直径20cm深さ4cmの柱穴を確認した。壁からの位置や形状から、出入りのための階段受け部、若しくは傘状の簡単な屋根等の施設の基部が設けられていたものと考えられる。

本遺構埋土中からは、弥生土器（42）が出土した。形状から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

3. 遺物

本遺跡の遺構からは、土器・石器・銅鍬・鉄鍬が出土した。以下、各遺物について述べる。なお、個々の土器の詳細は後掲する第1表出土土器観察表を参照されたい。

○弥生土器（第15～17図1～42）

広島湾周辺の弥生時代後期の土器については、口縁部の形態等の特徴から、

I式：口縁部屈曲点に比べ目縁端部が明らかに厚い。口縁端部を肥厚させ平らに仕上げられ、多くは3条程度の凹線が施されている。口縁部と体部は屈曲点よりも下で接合されており、この部分の内面が厚くなっている。外面部には削りの痕跡を残すものである。

II式：口縁部屈曲点と目縁端部の厚みはほぼ同じであるが、一部は端部直下を強くつまむことで一見厚く仕上げているものもある。目縁端部は平たく、あるいは丸くおさめられ、無紋か2条程度の凹線が施されている。口縁部と体部は屈曲点付近で接合されており、これに伴い屈曲点付近の内面が厚くなっている。内外面ともナデによって調整されている。

III式：口縁部は外に強く湾曲し、口縁部屈曲点に比べ口縁端部が薄く、端部は丸く仕上げられている。底部の厚さは体部とほぼ等しく、平底を残すものは殆ど無い。口縁部と体部は屈曲点付近で接合されているが、H式と異なり外面が厚くなっている。体部の器壁は薄く丸胴化しており、外面部には削りの痕跡が確認できなくなる。

との分類が従来から行われている。

以上の観点から、本遺跡出土の土器をみれば、I式は（9・13～15・19～22・26・27・31・33）で、III式については1点（36）だけで、それ以外はII式である。

ところで、本遺跡の出土土器の大半を占めたII式はさらに細分が可能で、初頭のもの、端部直下を強くつまむことで一見肥厚しているかのごとく見せかけ、端部に二条の凹線を施し、胴部最大

径を比較的高い位置に持つものが多く、一方終末のものは、口縁部が器厚をわずかに減じつつ強く外湾するようになり、胴部も丸胴化するなど、正式に継続する特徴をそれぞれ有する。このことから、さらに分類すると、初頭に属するのは(40)で;終末に属するものは(3・4・10・23・24・32)である。

また、(7・28・42)については山陰系の菱形土器と考えられるが、I式が弥生時代後期前葉、II式が後期中葉から終末、皿式が古墳時代初頭から前期前葉との従来の時期比定から考えれば、在地の土器との並行関係が注目される。

○石器

・砥石(第17～18図43～48)

S H 3 から(43)が、S H 4 から(44～46)が、S H 5 から(47)が、S X 1 から(48)が出土している。

(43)は全長307mm最大幅210mm厚さ115mmのやや平らな石の3面を利用している。使用面は磨耗している。使用面の一部に線状痕が見られる。

(44)は全長65mm最大幅51mm厚さ21mmの平らな石の1面を利用している。使用面は磨耗している。

(45)は全長112mm最大幅94mm厚さ49mmの平らな石の4面を利用している。使用面はいずれも磨耗している。使用面の一部に線状痕が見られる。

(46)は全長65mm最大幅51mm厚さ21mmの平らな石の4面を利用している。使用面はいずれも磨耗している。

(47)は全長74mm幅24mm厚さ23mmの四角柱状の石の5面を利用している。使用面はいずれも磨耗し、凹んでいる。使用面の一部に線状痕が見られる。

(48)は全長247mm最大幅295mm厚さ103mmのやや平らな石の1面を利用している。使用面は磨耗し、凹んでいる。使用面の一部に線状痕が見られる。

・磨り石(第17図49・50)

(49)はS H 2の埋土中から出土している。全長72mm最大幅35mm厚さ28mmの楕円形である。

(50)はS H 4の床面上から出土している。全長53mm最大幅37mm厚さ18mmの楕円形である。

・石錘(第18図51)

南側平坦面埋土中から出土している。平面形状は偏平な楕円形で、大きさは全長80mm幅63mm厚さ26mmである。長軸の両端に綱を固定するための打ち欠きがある。重さは17.8gである。

○銅鏃(第18図52)

南側平坦面埋土中から出土している。平面形状は三角鏃で鋒及び基部、茎部を欠いている。身の中央部に穿孔された穴が3ヶ所あり、逆三角形に配されている。残存長22mm最大幅21mm厚さ3mm

重さ 4.8g である。形状から非実用品と考えられる。

○鉄鏃（第18図53）

S H 5 の床面から出土している。平面形状は無茎の三角鏃で全長27mm最大幅18mm厚さ2mm重さ2.8g である。

第1表 鯛之迫遺跡出土土器観察表

([]:復元値)

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
1	甕	SH1 落ち際埋 土	器高 15.6 口径 [20.0] 胴部最大径 [21.1]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 内面 口縁部ナデ、口縁下部ヘラ磨き、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による7本の押引文を施す。	色調 明褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 良好 内面底部及び口縁部、外面胴部以下にスス付着
2	甕	SH2埋 土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面 口縁部ナデ。体部ハケ目後ナデ 内面 口縁部ナデ、体部ヘラ削り。 肩部に刺突文を施す。	色調 茶褐色 胎土 0.5~4mmの砂粒を多く含む 焼成 やや軟
3	甕	SH3	口径 15.3 胴部最大径 19.3	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面 口縁部ヘラ削り後ハケ目、以下ヘラ削り後ヘラ磨き後ハケ目。 内面 口縁部ハケ目、以下ヘラ削り一部後ハケ目。 肩部にヘラ状工具による刺突文を施す。	色調 褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を多く含む 焼成 やや軟調 外面胴部及び口縁部にスス付着
4	甕	SH3	口径 17.1 胴部最大径 [23.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面 口縁部ハケ目後ナデ、以下ヘラ削り後ヘラ磨き後ハケ目。 内面 口縁部はハケ目、以下ヘラ削り一部後ハケ目。 肩部にヘラ状工具による刺突文を施す。	色調 明褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 軟 内面底部及び外面肩部から胴部にスス付着
5	椀	SH3	器高 9.6 口径 16.9	口縁端部は平らにおさめる。底部は平底	外面 ハケ後ナデ、底部ヘラ削り後ナデ。 内面 口縁部ナデ、ヘラ削り後ヘラ磨き。	色調 明褐色 胎土 0.5~2mmの砂粒を多く含む 焼成 良好 内面底部及び口縁端部に黒斑残る
6	コシキ 形土器	SH3	下端部径[33.4]	上部は若干欠く。体部は口縁部からわずかに「ハ」の字状に広がりながら下方へのびる。下端部は平たくおさめている。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 上端部から体部ヘラ削り。下端部ハケ目。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
7	甕	SH3	器高 13.8 口径 14.0 胴部最大径 12.1	「く」の字状に外反する口縁に立ち上がり部が接合する複合口縁で、端部は丸くおさめる。	外面 口縁部ナデ、体部ハケ目後ヘラ磨き。 内面 口縁部ハケ目後ヘラ磨き、体部ヘラ削り。 口縁立ち上がり部及び肩部には、6本の凹線文を施す。	色調 茶褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
8	甕	SH3	器高 17.1 口径 [16.3] 胴部最大径 [15.3]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面 口縁部ハケ目後ナデ、胴部ヘラ削り後ハケ目、底部ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 0.5~2mmの砂粒を多く含む 焼成 やや軟 外面胴部及び口縁部にスス付着

([]:復元値)

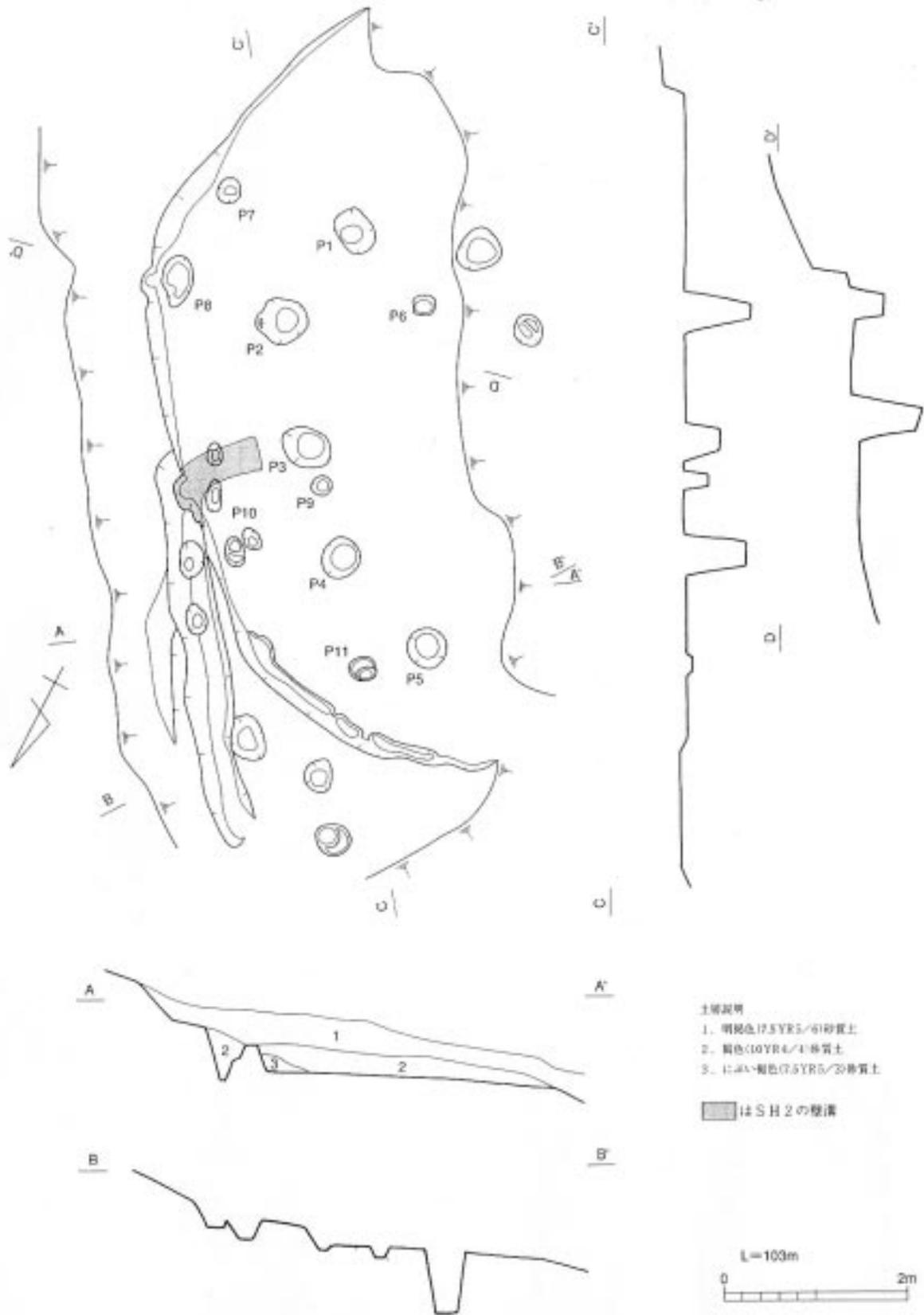
番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
9	甕	SH3埋土	口径 [19.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下肥厚し。3本の凹線を巡らす。	外面 ナデ、以下ヘラ削り後ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目以下ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 0.5~2mmの砂粒を含む 焼成 良好
10	甕	SH3西側埋土	口径 [22.1]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面 ナデ以下ヘラ磨き。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ磨き。胴部ヘラ削り後指ナデ。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 良好 内外面胴部から肩部にかけてスス附着
11	コシキ形土器	SH3西側埋土	上端部径 8.9 下端部径 [26.4]	上端部は平らにおさめる。体部は口縁部からわずかに広がりながら下方へのびる。下端部はやや丸くおさめる。体部に粘土を貼付けた把手痕を残す。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 上端部ヘラ削り後ナデ、以下ヘラ削り、下端部ハケ目。	色調 外面黄褐色 内面茶褐色 胎土 0.5~5mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
12	甕	SH3北西側埋土	口径 16.1	「く」の字状に外反する口縁に立ち上がり部が接合する複合口縁で、端部は丸くおさめる。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 橙褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
13	甕	SH4	口径 [17.2]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚する。	外面 ナデ、以下磨減著しく不明。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 0.5~2mmの砂粒を多く含む 焼成 やや軟
14	鉢	SH4	口径 [21.0]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚する。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突文を2段施す。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
15	甕?	SH4		端部が僅かに上下に肥厚し、3本の凹線を巡らす。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 明橙褐色 胎土 0.5~2mmの砂粒を含む 焼成 軟 外面口縁部及び胴部にスス附着
16	甕?	SH4		端部が僅かに上下に肥厚し、3本の凹線を巡らす。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 明灰褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
17	不明	SH4	底部径 6.1	底部は平底。	外面 ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟 外面にスス附着
18	甕?	SH4		端部が僅かに上下に肥厚し、3本の凹線を巡らす。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 良好
19	甕	SH4		口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚し、3本の凹線を巡らす。	外面 口縁部ナデ、体部ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ハケ目、ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による横ハ字状に刺突文を施す。	色調 外面茶褐色 内面橙褐色 胎土 0.5~4mmの砂粒を多く含む 焼成 やや軟

([] : 復元値)

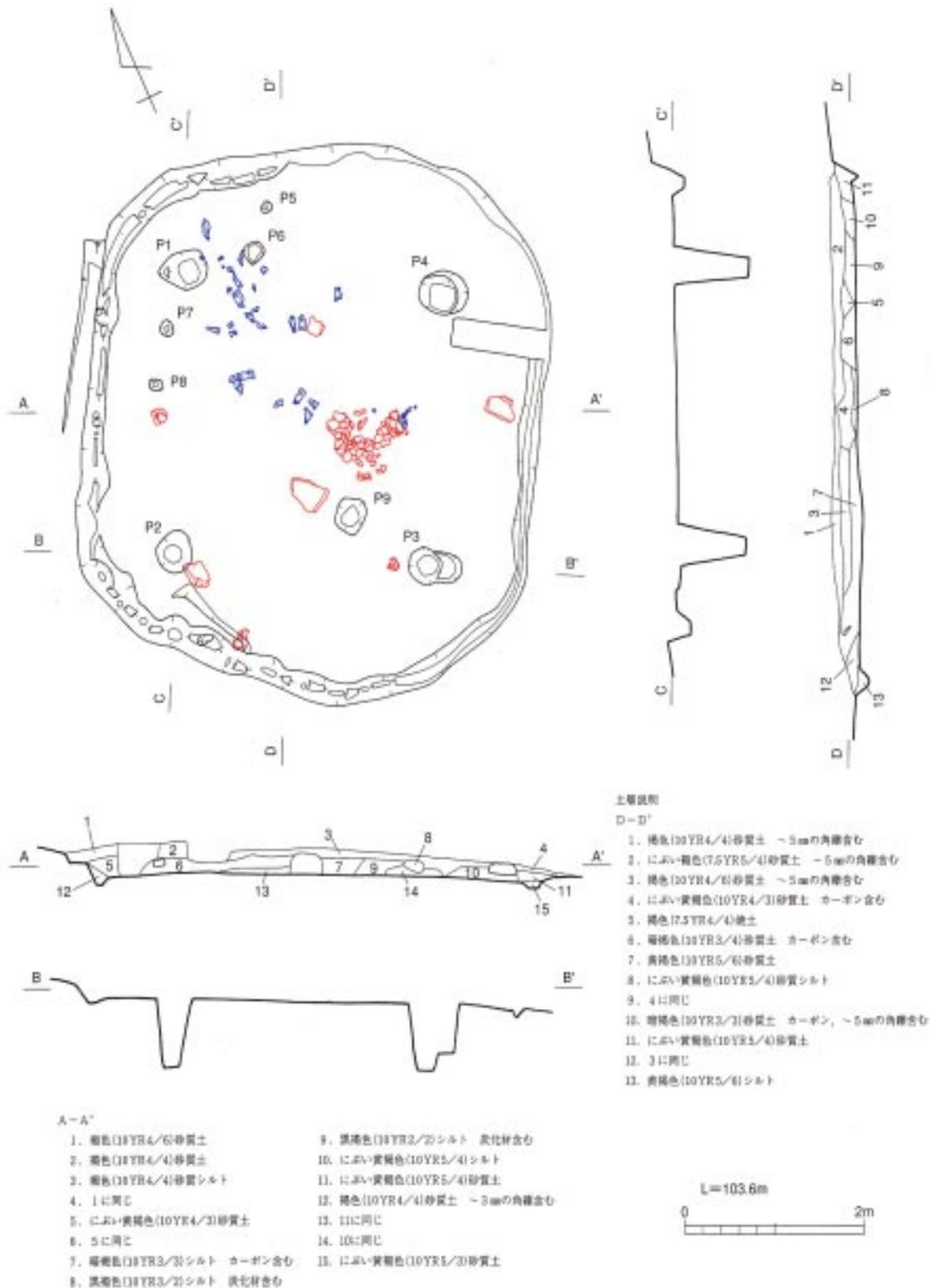
番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
20	甕	S H 4	口径 [18.0]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下肥厚し、やや平らにおさめる。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ、体部ヘラ削り。	色調 橙褐色 胎土 0.5~4mmの砂粒を多く含む 焼成 軟 外面体部にスス附着
21	甕	S H 4		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平らにおさめる。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ、体部ヘラ削り。	色調 黄茶褐色 胎土 0.5~4mmの砂粒を多く含む 焼成 軟
22	甕?	S H 4 埋土		端部は平らにおさめる。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 褐色 胎土 0.5~2mmの砂粒を含む 焼成 軟
23	甕	S H 4	器高 16.3 口径 [16.1] 胴部最大径 11.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめる。	外面 口縁部ハケ目後ナデ、胴部ヘラ削り後ハケ目、底部ヘラ削り、一部指頭圧痕。 内面 口縁部ナデ、ハケ目、以下ヘラ削り。	色調 明褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を多く含む 焼成 良好 内面口縁部、外面胴部及び口縁端部にスス附着
24	甕	S H 4 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや平らにおさめる。	外面 口縁部ナデ、体部ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ、体部ヘラ削り後ナデ。 肩部に貝殻による刺突文を施す。	色調 茶褐色 胎土 0.5~6mmの砂粒を多く含む 焼成 良好
25	鉢	S H 4 埋土 (炭化層)		口縁部は短く外反し、端部はほぼ平らにおさめる。	外面 口縁部ハケ目後ナデ、体部ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 体部上半に貝殻による刺突文を施す。	色調 茶褐色 胎土 0.5~3.5mmの砂粒を含む 焼成 良好
26	甕	S H 4 埋土 (炭化層)	口径 [13.6]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚し、3本の凹線を巡らす。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ、体部ヘラ削り。 胴部上半に刺突文を施す。	色調 黄褐色 胎土 0.5~4mmの砂粒を含む 焼成 良好
27	甕	S H 4 埋土 (炭化層)		口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚し、やや平らにおさめる。	外面 ナデ、体部下半ヘラ磨き。 内面 口縁部ナデ、体部ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突文を施す。	色調 黄褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟 外面体部下半に黒斑附着
28	甕?	S H 4 埋土 (炭化層)		「く」の字状に外反する口縁に立ち上がり部が接合する複合口縁で、端部は丸くおさめる。	外面 口縁部磨滅著しく不明、以下ナデ。 内面 ナデ。	色調 外面茶褐色 内面橙褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を多く含む 焼成 やや軟
29	甕	S H 4 埋土 (炭化層)		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ、体部ヘラ削り。 肩部に刺突文を施す。	色調 黄褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
30	不明	S H 4 埋土 (炭化層)	底部径 2.7	底部はやや窪み底。	外面 ハケ目後ヘラ磨き。 内面 ヘラ削り。	色調 黄褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を多く含む 焼成 良好

([]: 復元値)

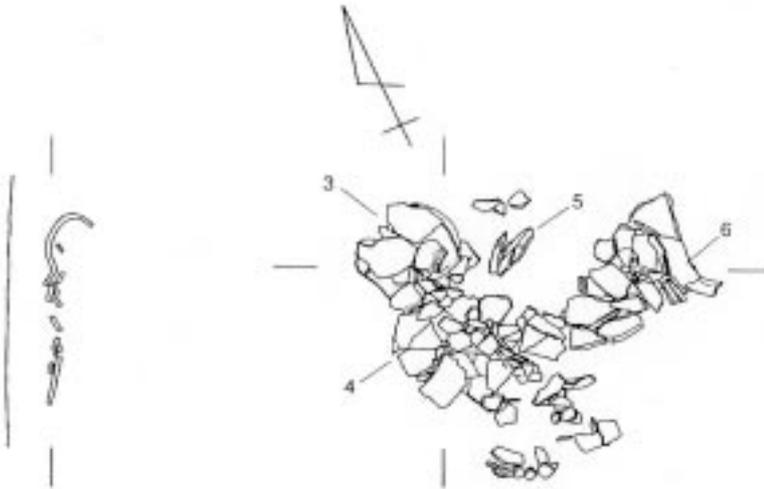
番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
31	高坏	S H 4 埋土 (炭化層)		高坏の脚部。杯底部の成形は円盤充填が行われる。	外面 ヘラ磨き後ナデ。 内面 ナデ。指頭圧痕。脚部中央に櫛歯状工具による5本の凹線文が施されている。	色調 黄褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 良好
32	甕?	S H 5		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや尖り気味におさめる。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
33	甕?	S H 5 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部が僅かに上下に肥厚し、3本の凹線を巡らす。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 肩部に二枚貝による刺突文及びヘラ状工具による4本の波状文を施す。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 やや軟
34	壺	S X 1		口縁部は外反し、端部は不整形である。	外面 口縁部ナデ、体部ヘラ磨き。 内面 口縁部ナデ、体部ヘラ磨き。	色調 外面黄茶色 内面黄褐色 胎土 0.5~4mmの砂粒を多く含む 焼成 良好
35	不明	S X 4		端部は平らにおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 橙褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 良好
36	甕	S X 4 北側埋土	器高 21.4 口径 16.5 胴部最大径 16.5	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面 ハケ目。 内面 口縁部ハケ目、以下ヘラ削り後ハケ目。	色調 橙褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 良好
37	椀	S X 4 西側埋土	口径 [16.7]	口縁端部は平らにおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部ハケ目後ナデ、以下ナデ。	色調 赤褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 良好
38	甕	S X 4 西側埋土	口径 12.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや丸くおさめる。	外面 ヘラ磨き。 内面 口縁部ヘラ磨き、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 0.5~3mmの砂粒を含む 焼成 良好
39	椀	S X 4 西側埋土	器高 9.0 口径 [16.0] 底径 1.8	口縁端部は平らにおさめる。底部は窪み底。	外面 ハケ目。 内面 口縁部ハケ目、以下ヘラ削り後ハケ目。	色調 茶褐色 胎土 0.5mmの砂粒を含む 焼成 良好
40	甕?	S K 2 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は2本の凹線を巡らす。	外面 ナデ。 内面 ナデ、以下ヘラ磨き。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 軟
41	甕?	S K 2 埋土		端部が僅かに上下に肥厚し、平らにおさめる。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を含む 焼成 軟
42	甕	S K 3 埋土	口径 [19.0]	「く」の字状に外反する口縁に立ち上がり部が接合する複合口縁で、端部は丸くおさめる。	外面 ナデ。 内面 ナデ。 口縁部立ち上がり部には、6本の凹線文を施す。	色調 明褐色 胎土 0.5~1mmの砂粒を多く含む 焼成 良好



第4図 SH1・2実測図 (S=1:60)



第5図 SH3実測図 (S=1:60)

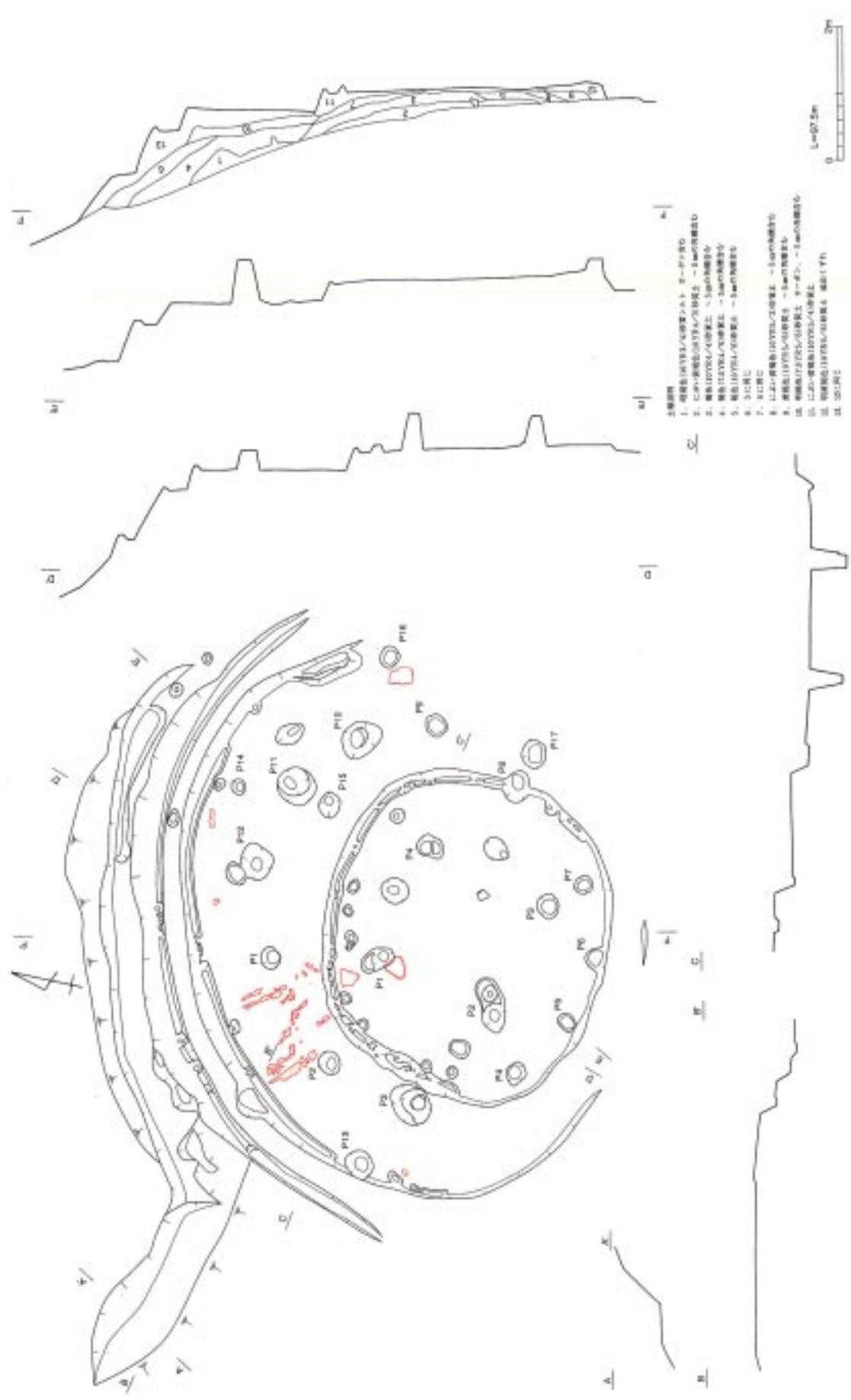


番号は土器番号

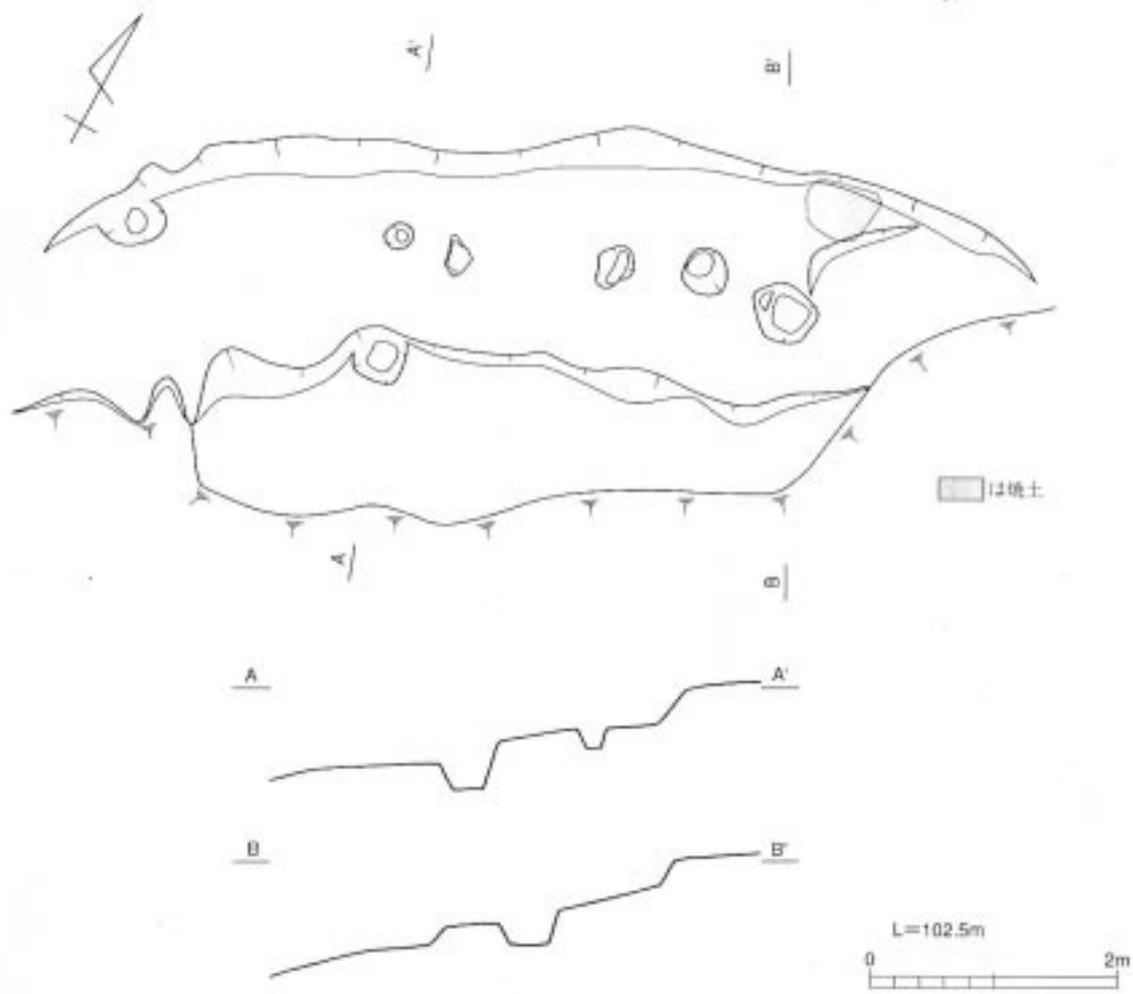


L=103.6m

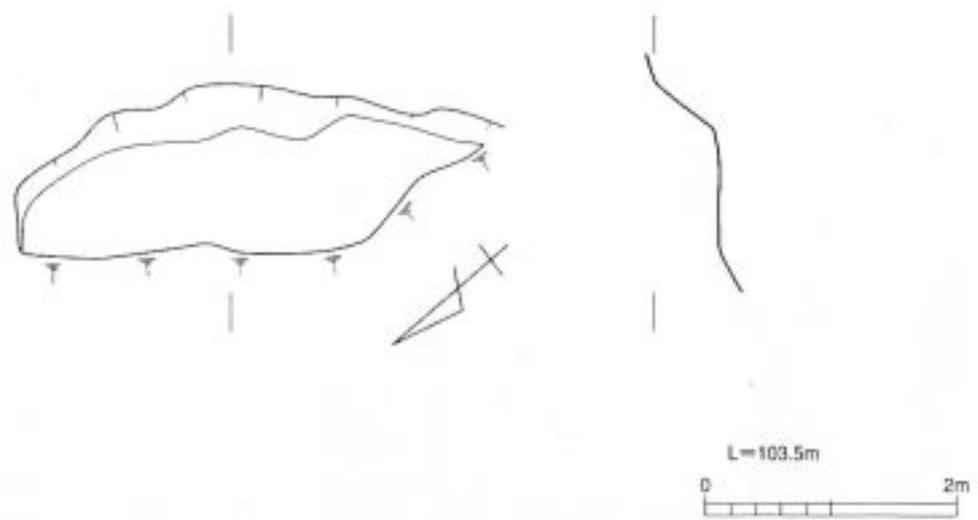




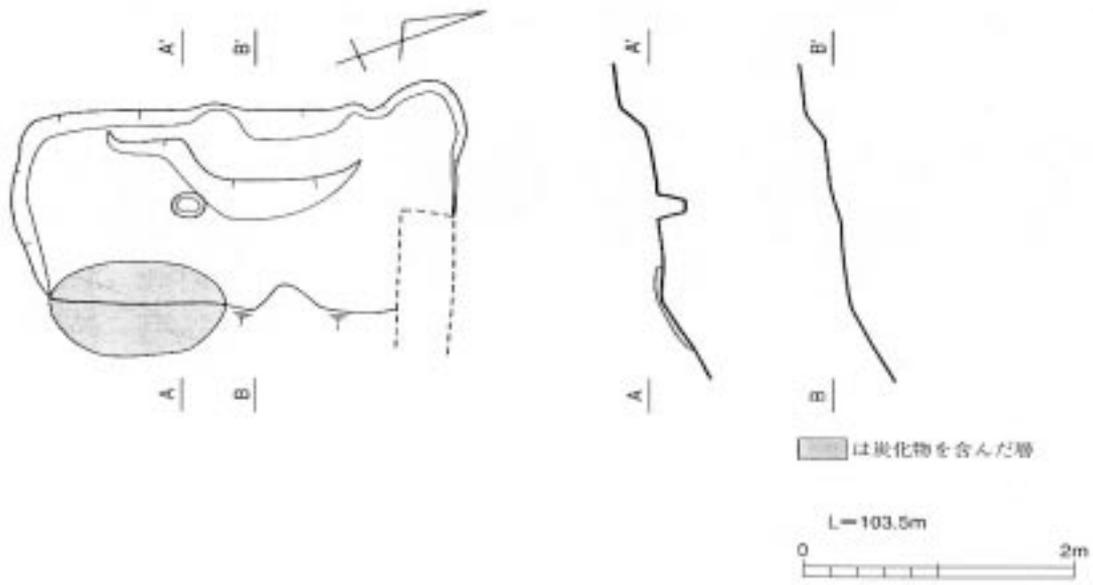
第7圖 S.H.4・5実測図 (S=1:60)



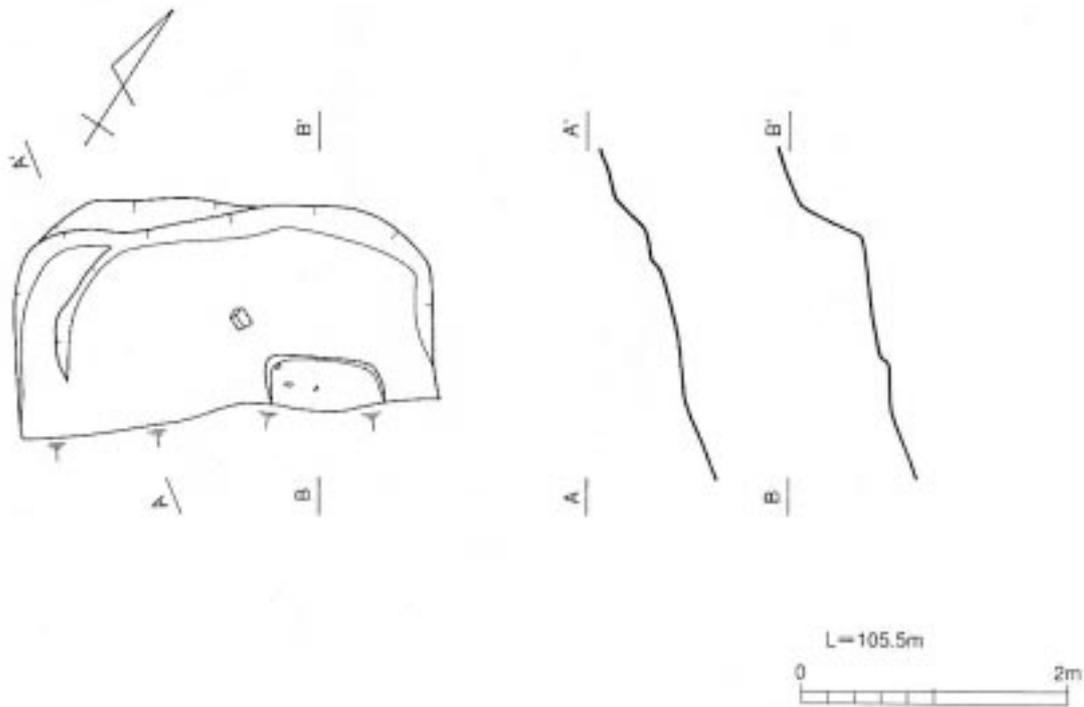
第8図 SX 1 実測図 (S = 1 : 60)



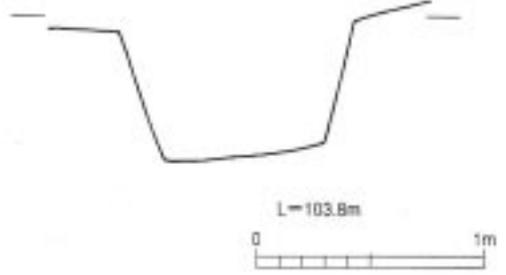
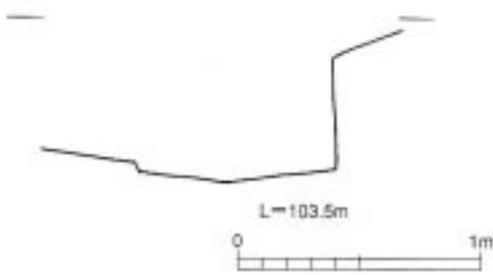
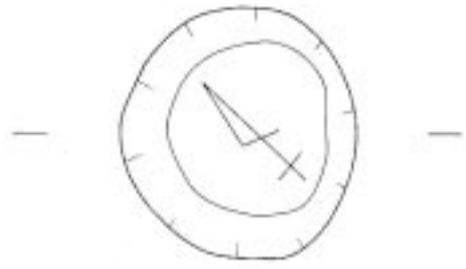
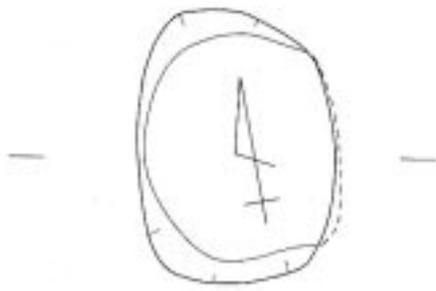
第9図 SX 2 実測図 (S = 1 : 60)



第10図 SX 3 実測図 (S = 1 : 60)

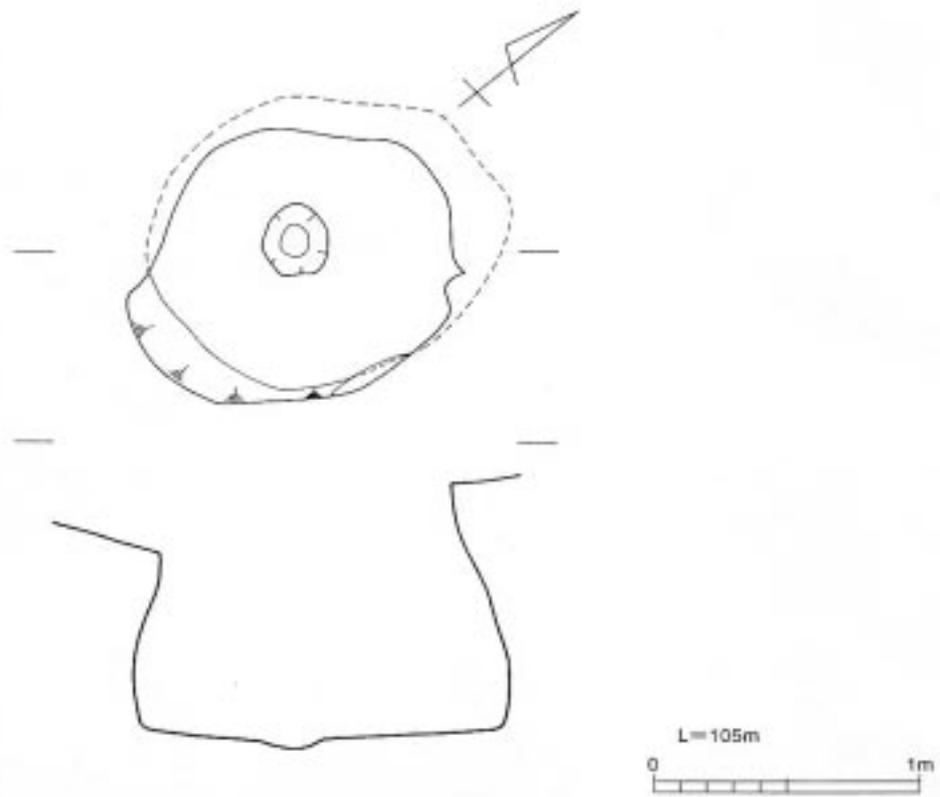


第11図 SX 4 実測図 (S = 1 : 60)

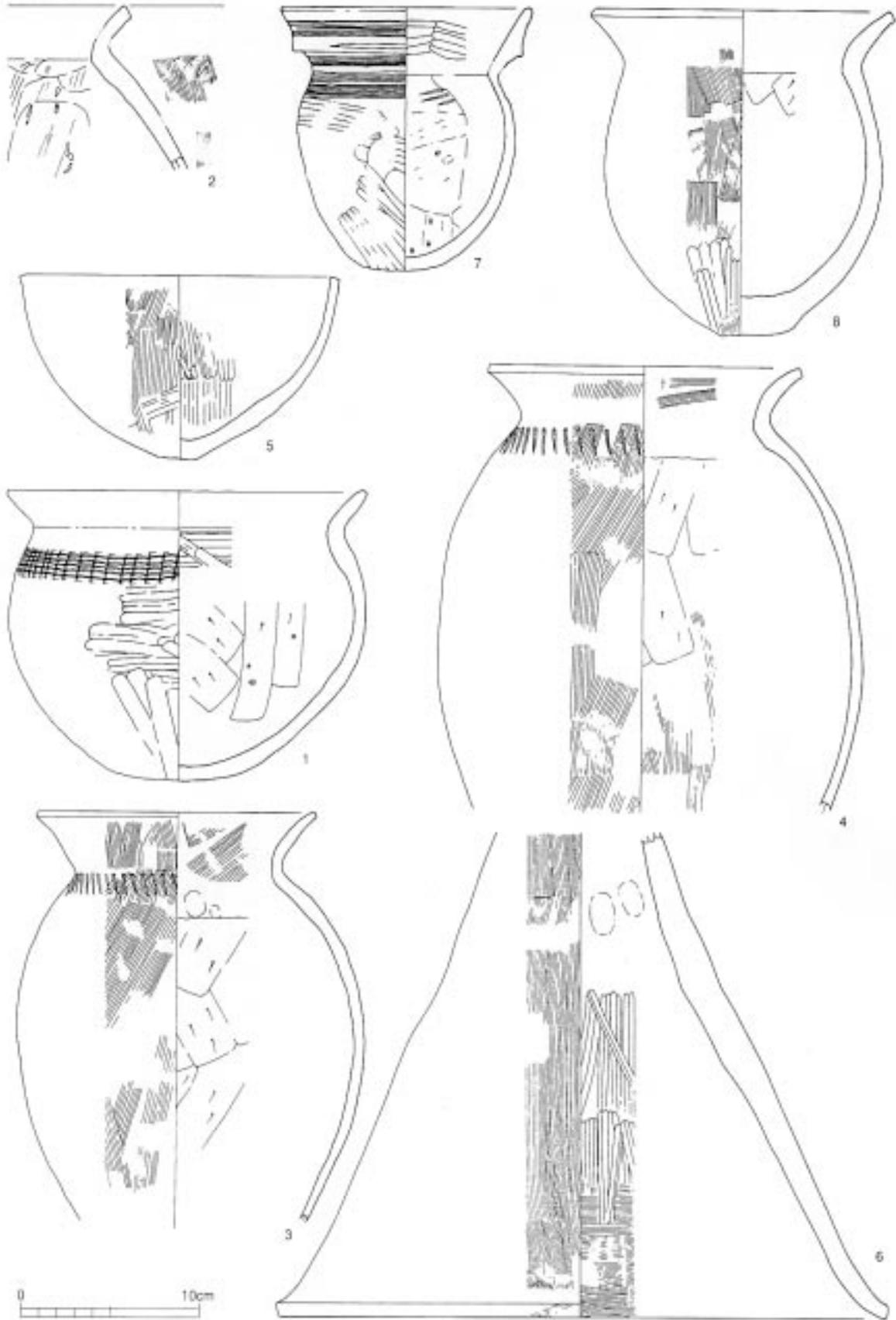


第12图 SK 1 实测图 (S = 1 : 30)

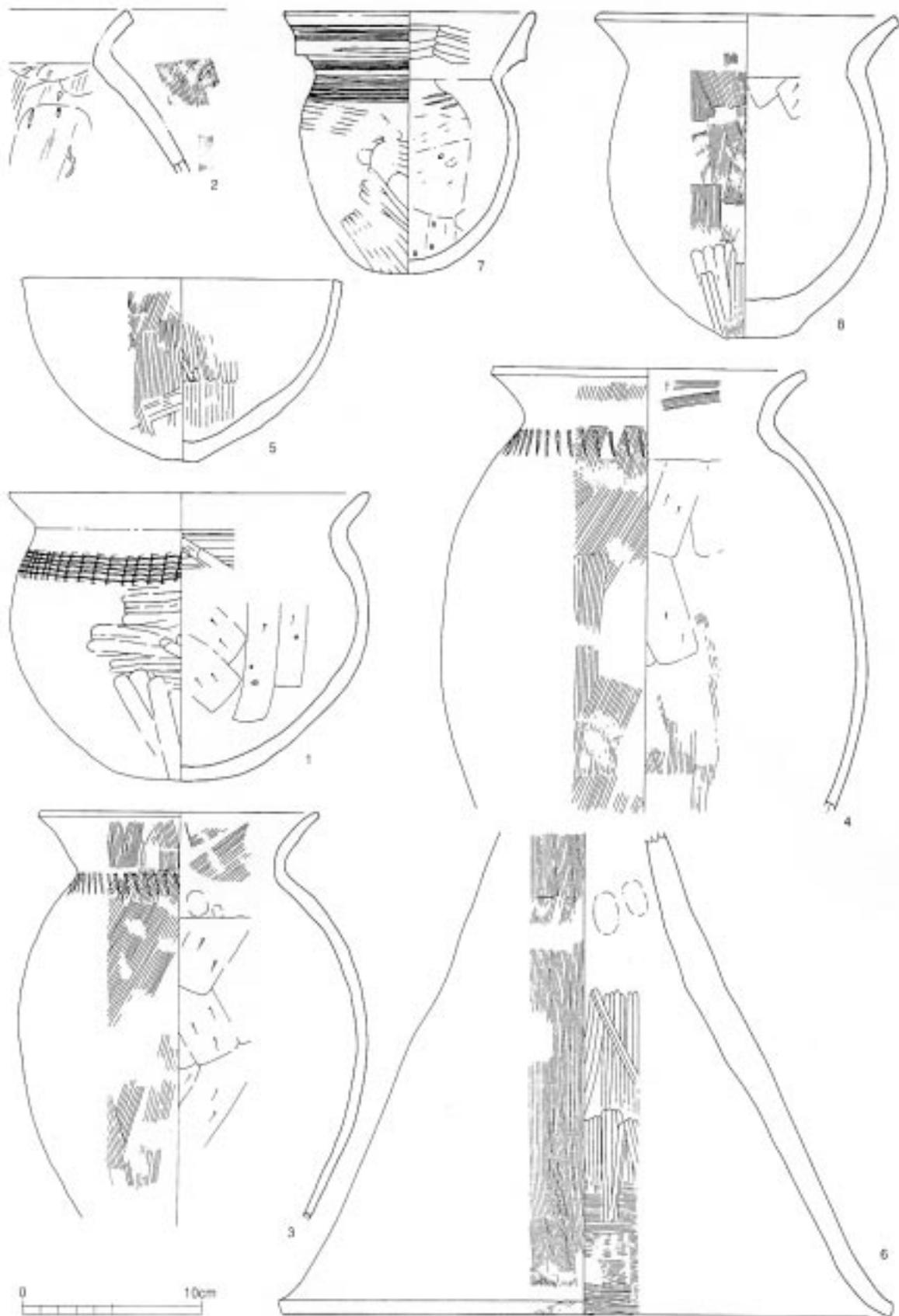
第13图 SK 2 实测图 (S = 1 : 30)



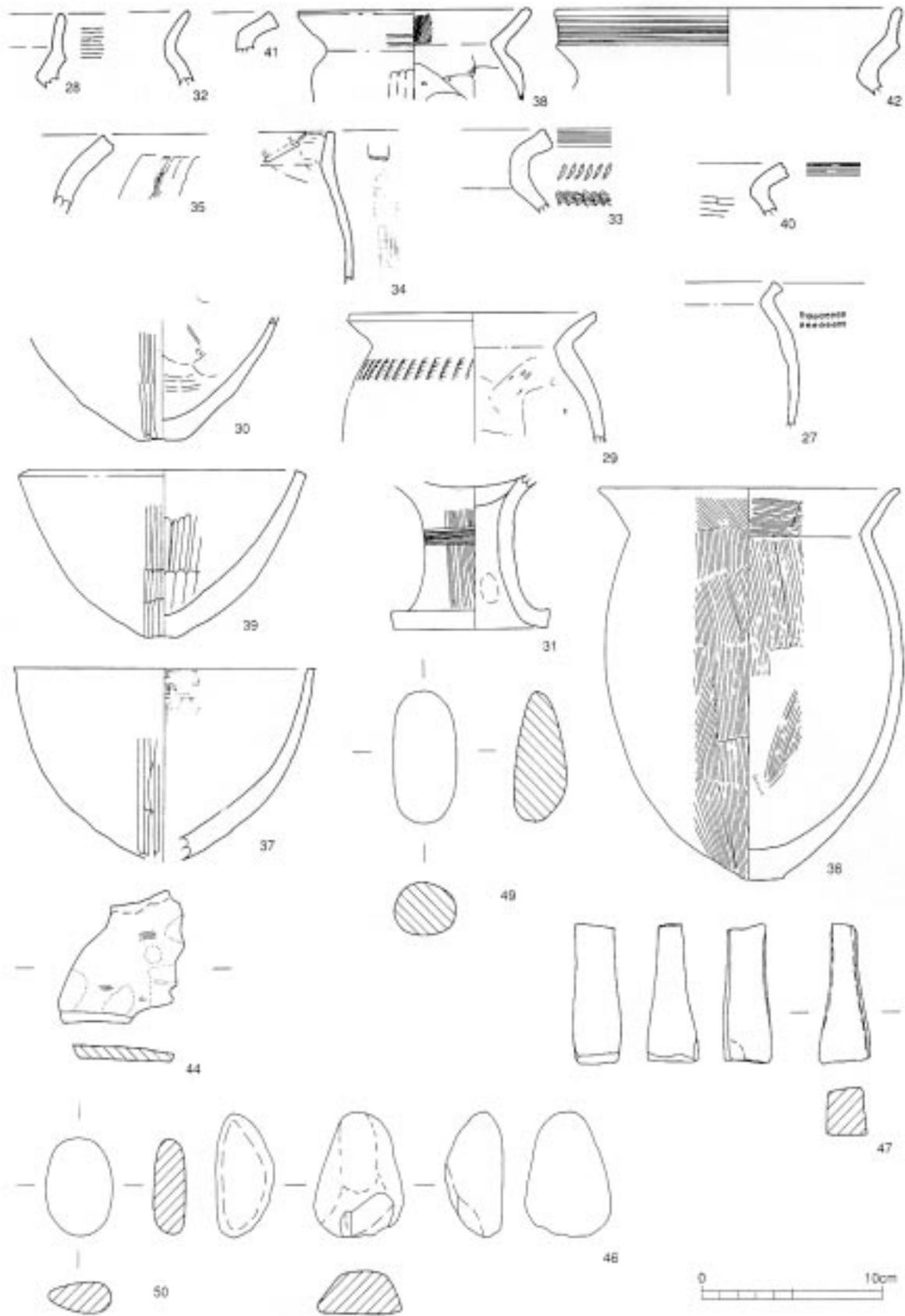
第14图 SK 3 实测图 (S = 1 : 30)



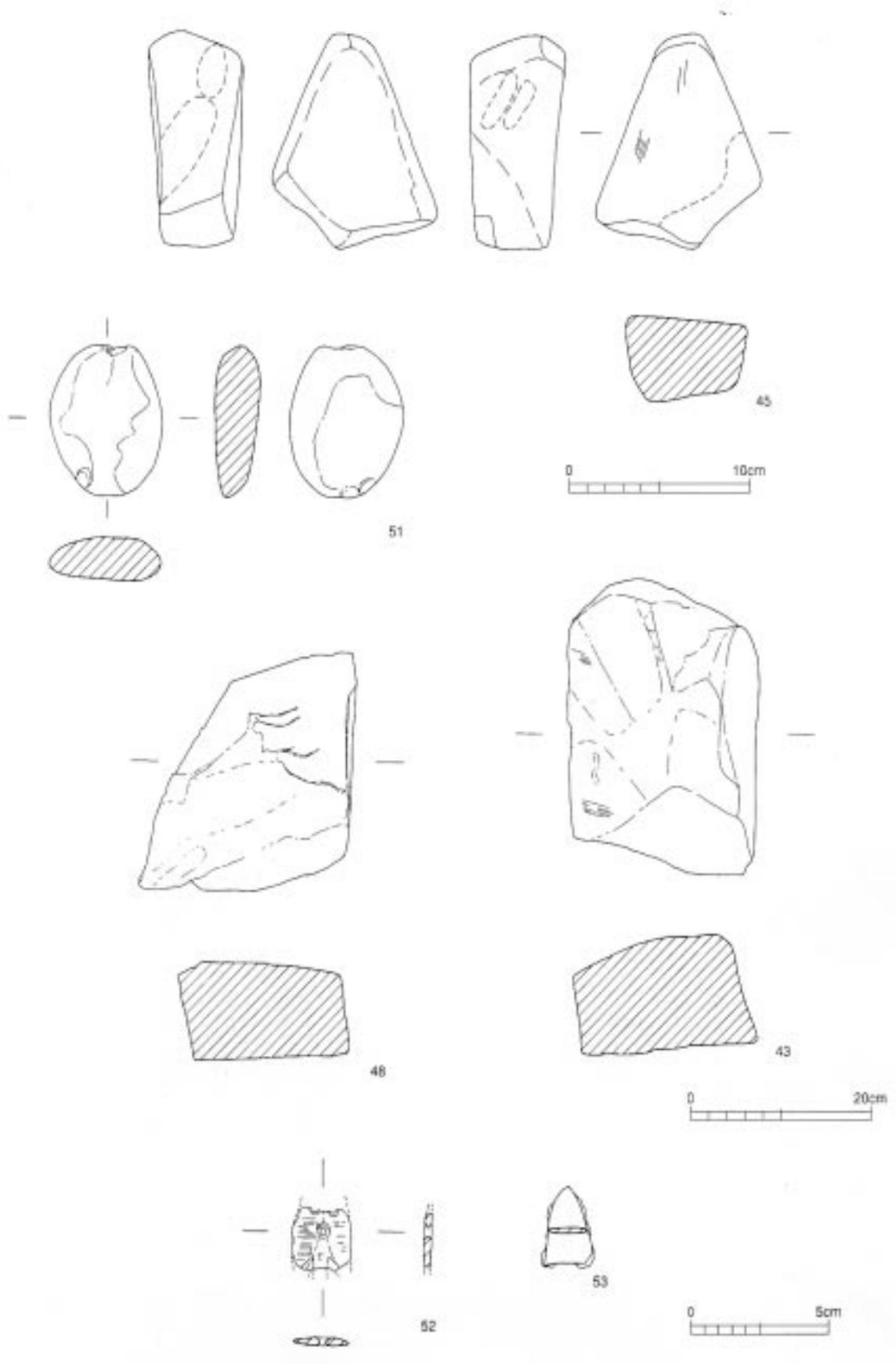
第15図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(1)(S = 1 : 3)



第 16 図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(2)(S = 1 : 3 11のみ 1 : 4)



第17図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(3)(S = 1 : 3)



第18図 鯛之迫遺跡出土遺物実測図(4)(S = 1 : 3 43・48は1 : 6 52・53は1 : 2)

IV まとめ

・鯛之迫遺跡の集落の構成及び変遷について

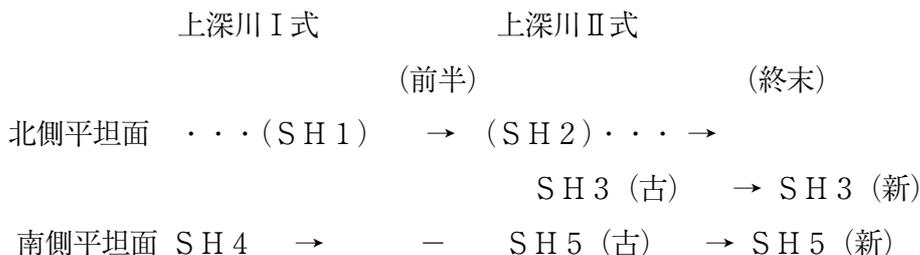
本遺跡は、調査の結果、竪穴住居跡5軒、テラス状遺構4ヶ所、土坑3基を確認した。また、遺物としては、弥生土器・石器（砥石など）・青銅器（銅鑑）・鉄器（鉄鎌）が出土した。

本遺跡は南北に隣接する二段の平坦面からなる。北側平坦面にはSH1～3, SX1～4, SK1～3が位置するが、住居跡は南半部に集中し、さらにSH1・2は重複して南端に位置する。また南側平坦面では、北端にSH4・5が重複して位置していた。

これらの遺構の時期は、出土した土器からSH4が上深川I式に、SH3・5, SX1・4が上深川II式の終末に使用されていたと考えられる。SH3・5は、それぞれ1回以上の建て直しが行われていたことから、使用開始時期は上深川H式中頃まで遡る可能性が高い。SH1・2については時期を特定することはできなかった。

次に、竪穴住居跡の平面プランを見ると、直径8m前後の円形の大型のもの（SH1・4）と、直径もしくは一辺が4～6mの小型のもの（SH2・3・5）に大別することができる。この二群の時期を見ると、前述のように、大型のグループのSH4は上深川I式に、また小型のグループのSH3・5は上深川II式でも中頃以降のものにそれぞれ属している。このことから、SH1の時期については、SH4の築造時期と大きく隔たらないものと考えられる。SH2については時期が不明であるが、土層観察によればSH1がSH2よりも先行している。

以上から、本遺跡の住居跡は、以下のような変遷を想定することができる。



よって、上深川I式の時期は最大2軒、上深川II式の終末もしくはその直前において最大で2～3軒の住居が想定できる。

さて、II章で述べたとおり、太田川下流域で確認された他の弥生時代の集落を見ると、①十数軒以上の住居をもち、弥生時代中期後葉もしくは上深川I式から上深川III式までの2期以上にまたがって存続するもの、②一時期に1軒から数軒の住居が営まれた小規模なものに大別できる。これにあてはめて本遺跡を見ると、遺構の数からは後者の小規模な遺跡とみなすことができる。一方、存続期間についてみると、明確な上深川II式前半の住居跡は見当たらず、遺構としての連続性には疑問が残るものの、遺物から見れば、上深川I式～III式古段階まで連続しており、前者に属する特徴を有する。

ところで、住居の立地等をみると、SH 4・5は、調査範囲及びその近辺の他の場所と比べて条件の悪い斜面の落ち際に住居が作られている。このことは、南側の他の好適な場所が既に使用できない状況＝他の住居が建てられていたことを示していると見ることができよう。さらに皿章では割愛したが、北側平坦面の北端近くに位置するSK 3の周辺埋土からは、多数の土器片が出土している。これらの土器片は周辺の地形から、本遺跡の範囲外北側から流れ込んできたものと考えられるものであり、この部分にも遺構が存在していたことを示しているといえよう。

すでに述べてきたように、本遺跡の位置する丘陵は住宅団地と大学の造成によって尾根筋が削られた結果、従来の地形を失い、独立丘陵状となっている。しかしながら旧地形図を見ると、本来は南の安川方向に緩やかに延びた低丘陵の一つである。この尾根の東側には、広島市域において最大規模の弥生時代の集落跡である毘沙門台遺跡¹⁾・毘沙門台東遺跡²⁾が位置する尾根が延びている。この毘沙門台遺跡や毘沙門台東遺跡の尾根と、本遺跡の尾根を比べるとほぼ同様の規模、形状である。このような地形と前段で見てきた状況をあわせて考えれば、本遺跡の範囲は本来南側にさらに広がっていた可能性が考えられる。よって、本遺跡は十数軒以上の住居をもった拠点的な集落であった可能性が高い。

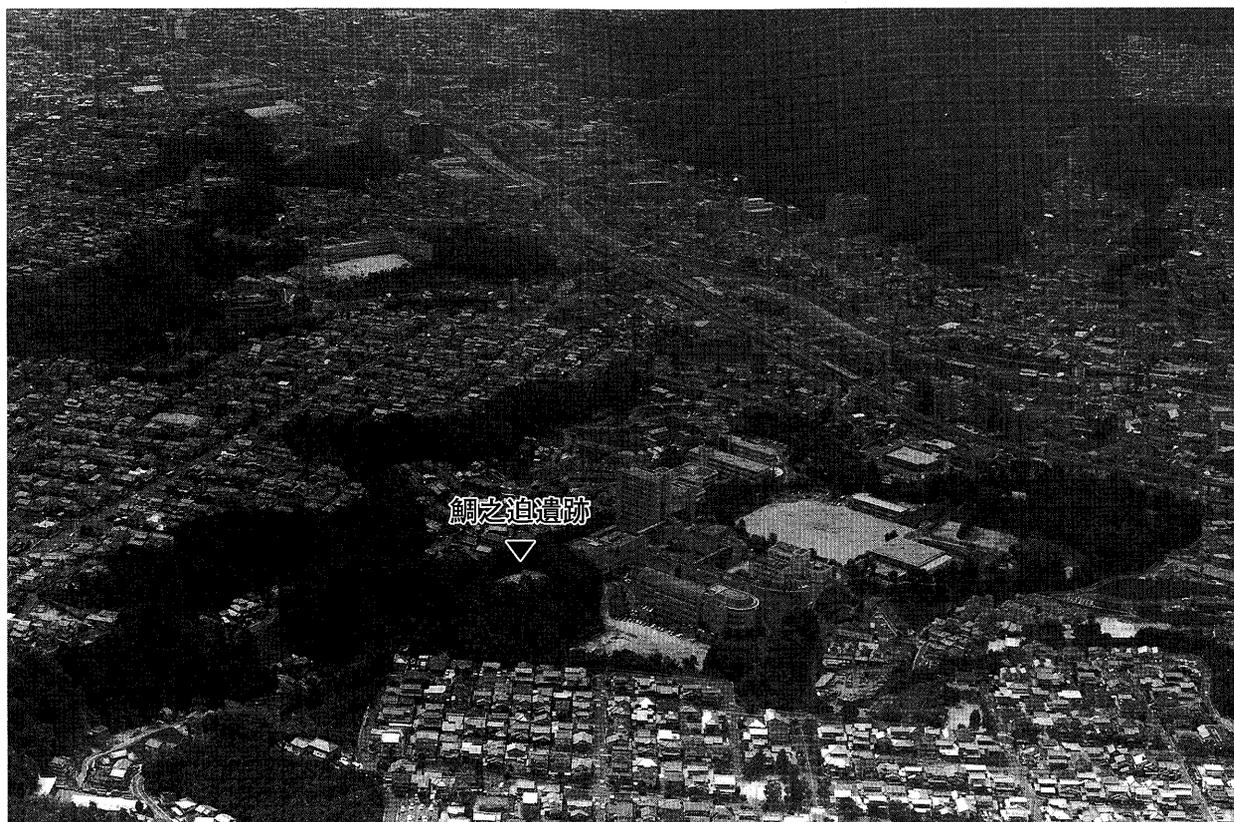
また、埋土中の土器の出土状況を分析すると北側平坦面では上深川Ⅱ式の土器が、南側平坦面では上深川Ⅰ式の土器が多く出土している。このことは、丘陵の使用範囲が時期によって若干変化していたと見ることができる。加えて、SH 1・2 / SH 4・5は、上深川Ⅱ式初頭に一度放棄された後、その場所しか住居を建てる場所が残っていなかったかのように終末の時期に重複して作られている。このことは、本遺跡は集落範囲の北端に位置し、人々は時期によって集落内を移動し、生活場所を少しずつ変えていたことを示すものと考えられる。

本遺跡が位置する安川流域には、太田川や八幡川・石内川に見られるような主要な河川の小支流ごとに、拠点となる集落が現在まで確認されていない。また、本遺跡とこれら遺跡が尾根一つを挟んで隣り合っている、毘沙門台遺跡・毘沙門台東遺跡をとりまく安川流域の当時の状況の復元と検証がこれまでできなかったが、今回の調査ではこれらデータ収集の絶好の機会となった。残念ながら、宅地開発等によってすでに原地形が失われ、調査範囲も限られていたため、十分な資料を得られたとは言い難いが、安川流域においても太田川下流域などと同様の拠点集落が存在する手がかりをつかむことはできたと考えられる。今後の調査に期待し、さらに資料の増加を待って検討を加えてみたい。

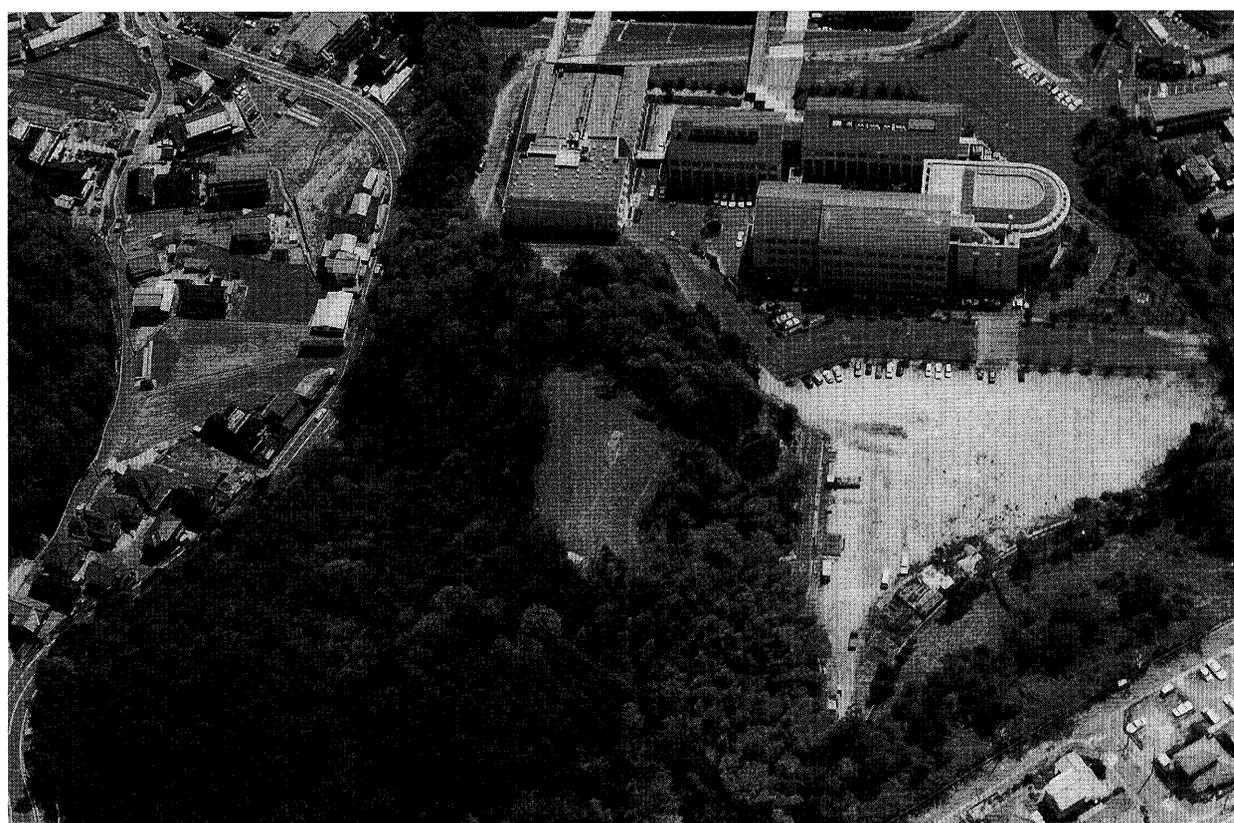
注

1. 未報告のため詳細は不明である。
2. 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』1990年

圖 版



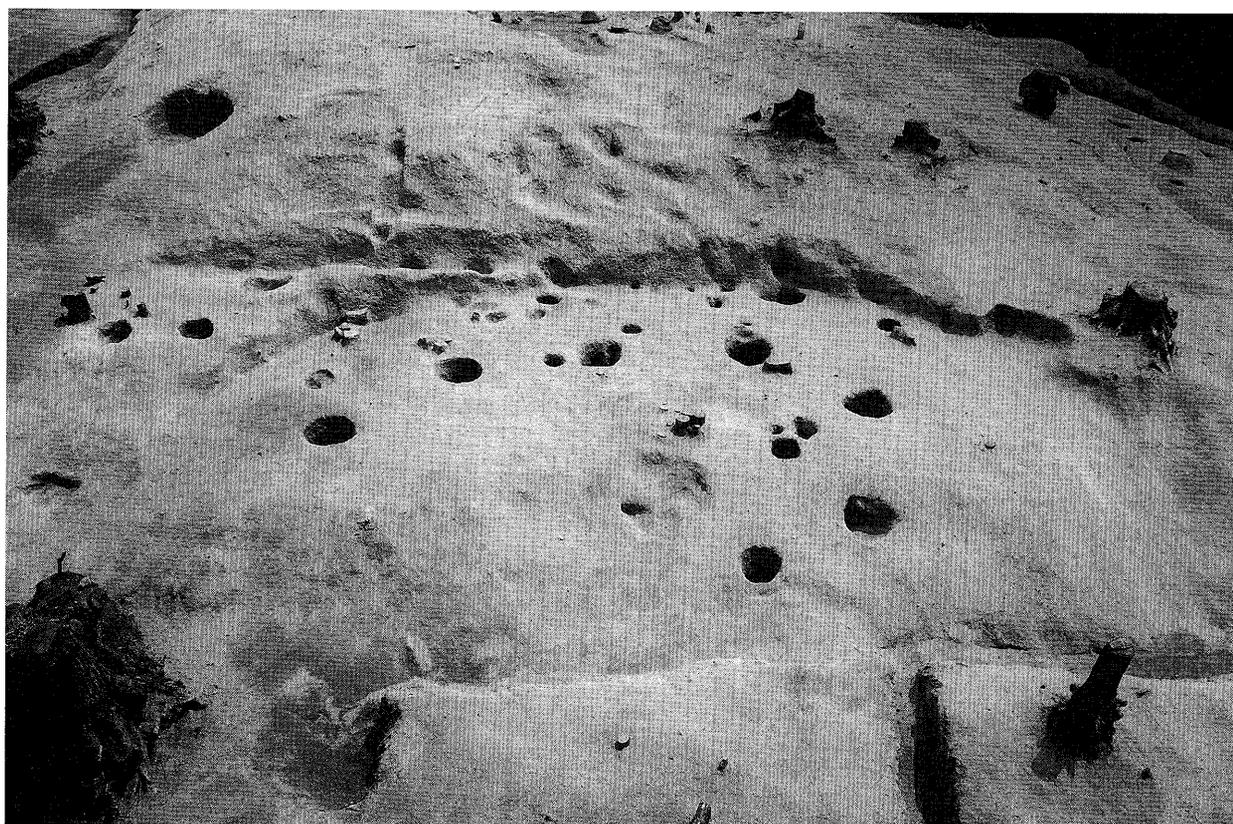
a. 鯛之迫遺跡遠景（航空写真）



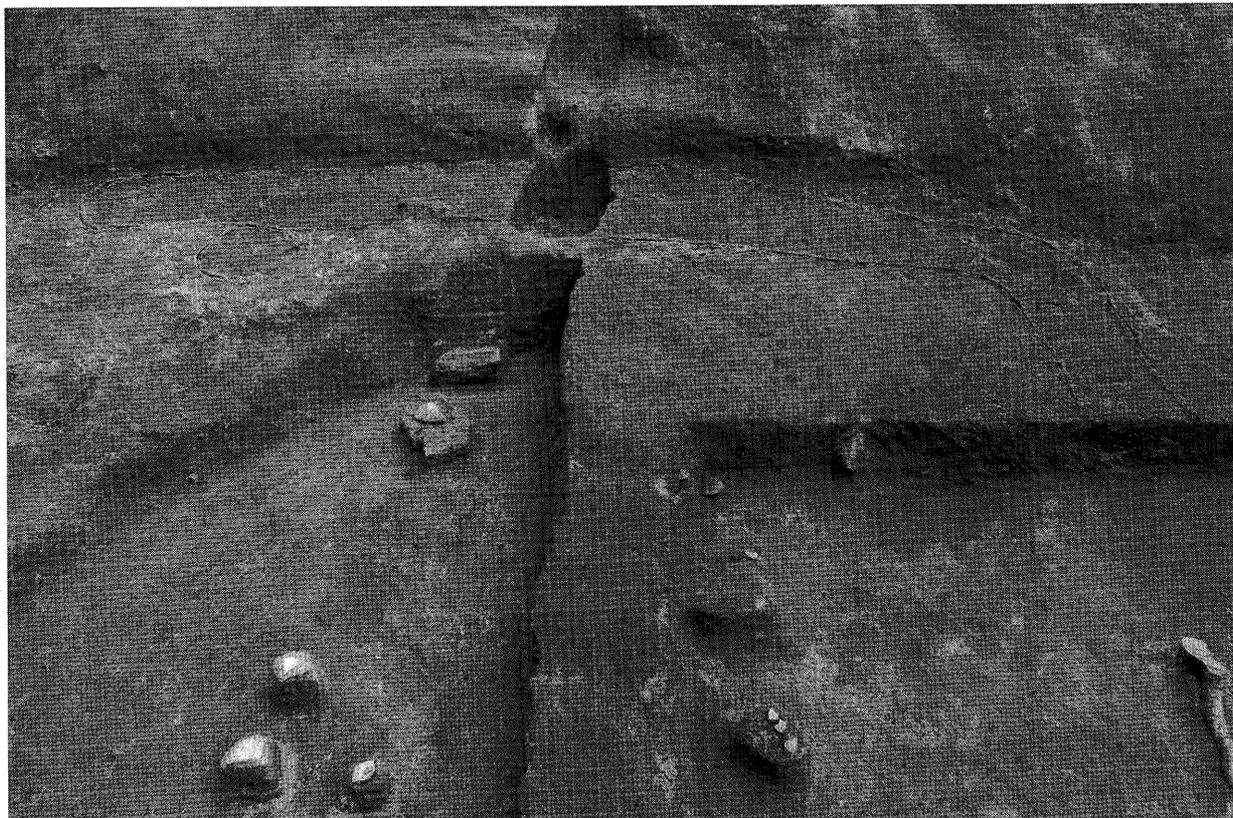
b. 鯛之迫遺跡（調査前）（航空写真）



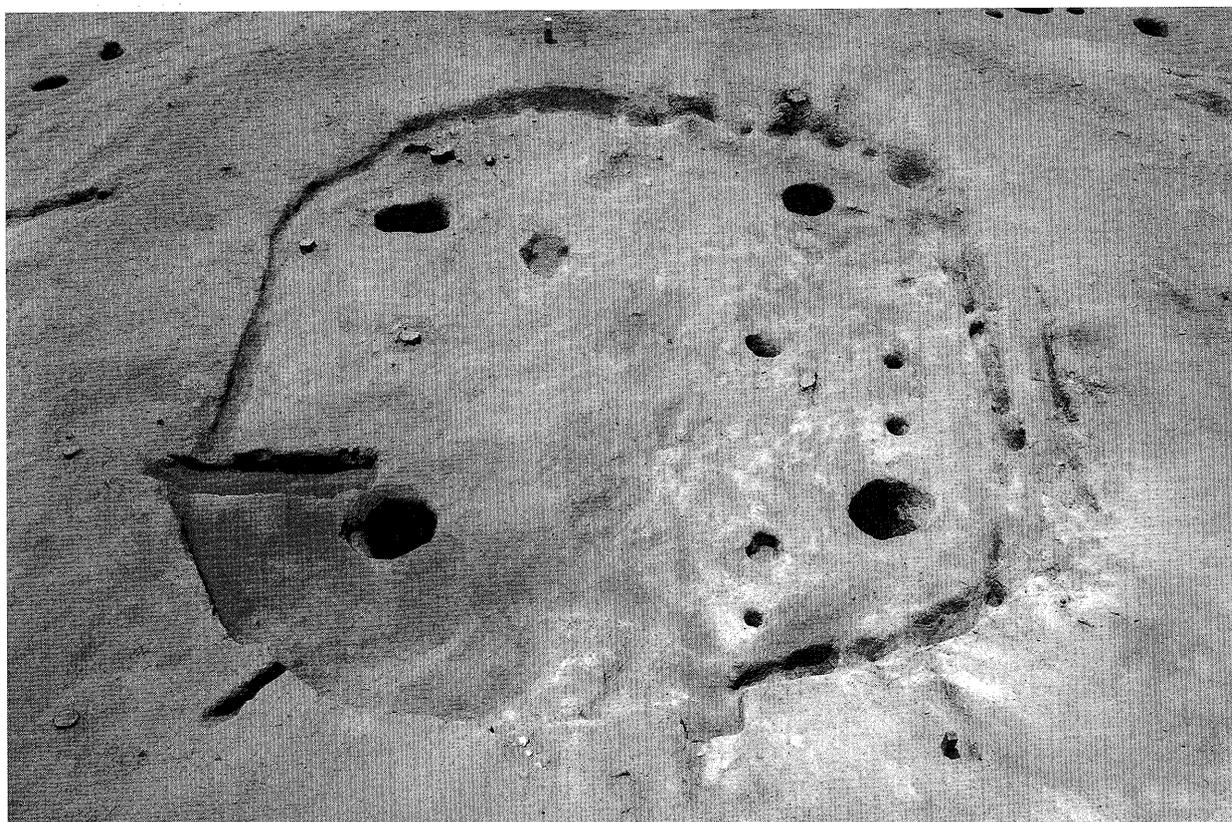
a. 鯛之迫遺跡（調査後）（航空写真）



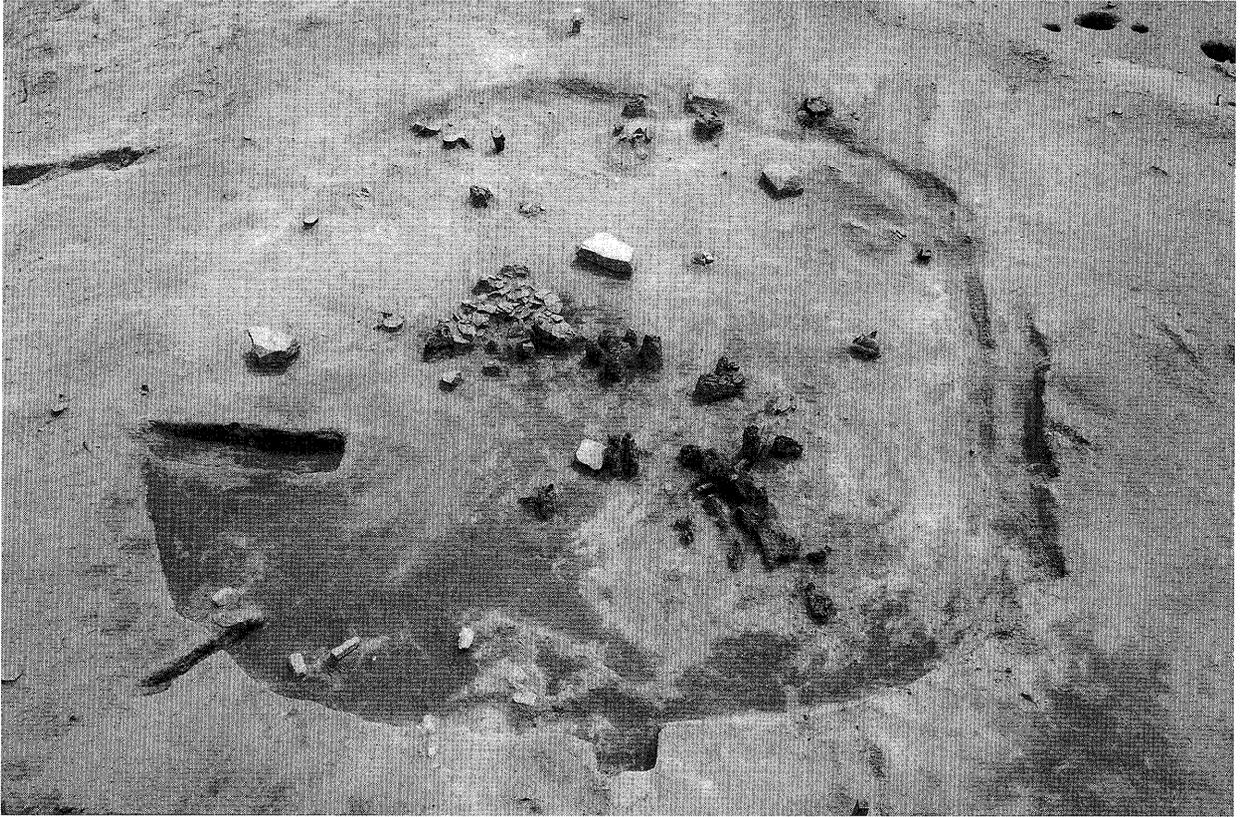
b. SH1・2（南から）



a. SH2 壁溝検出状況 (南から)



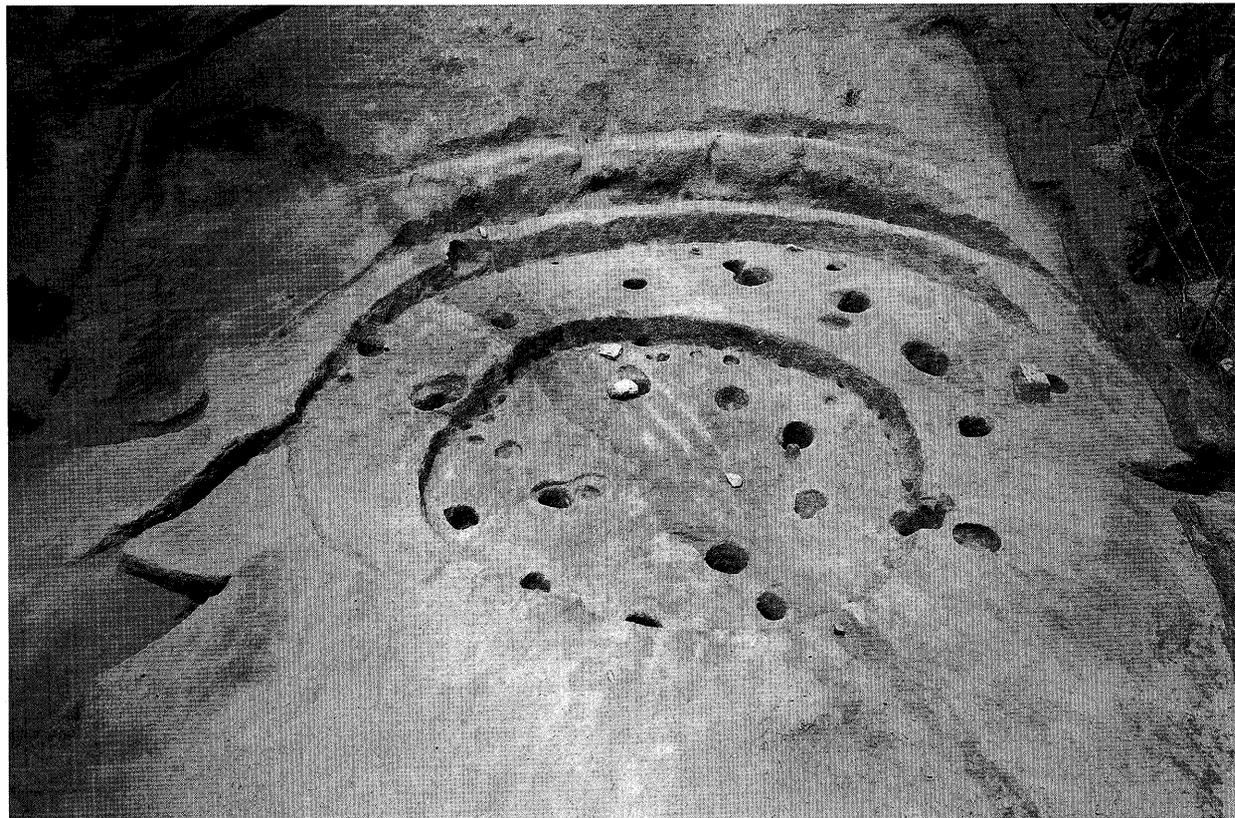
b. SH3 (北から)



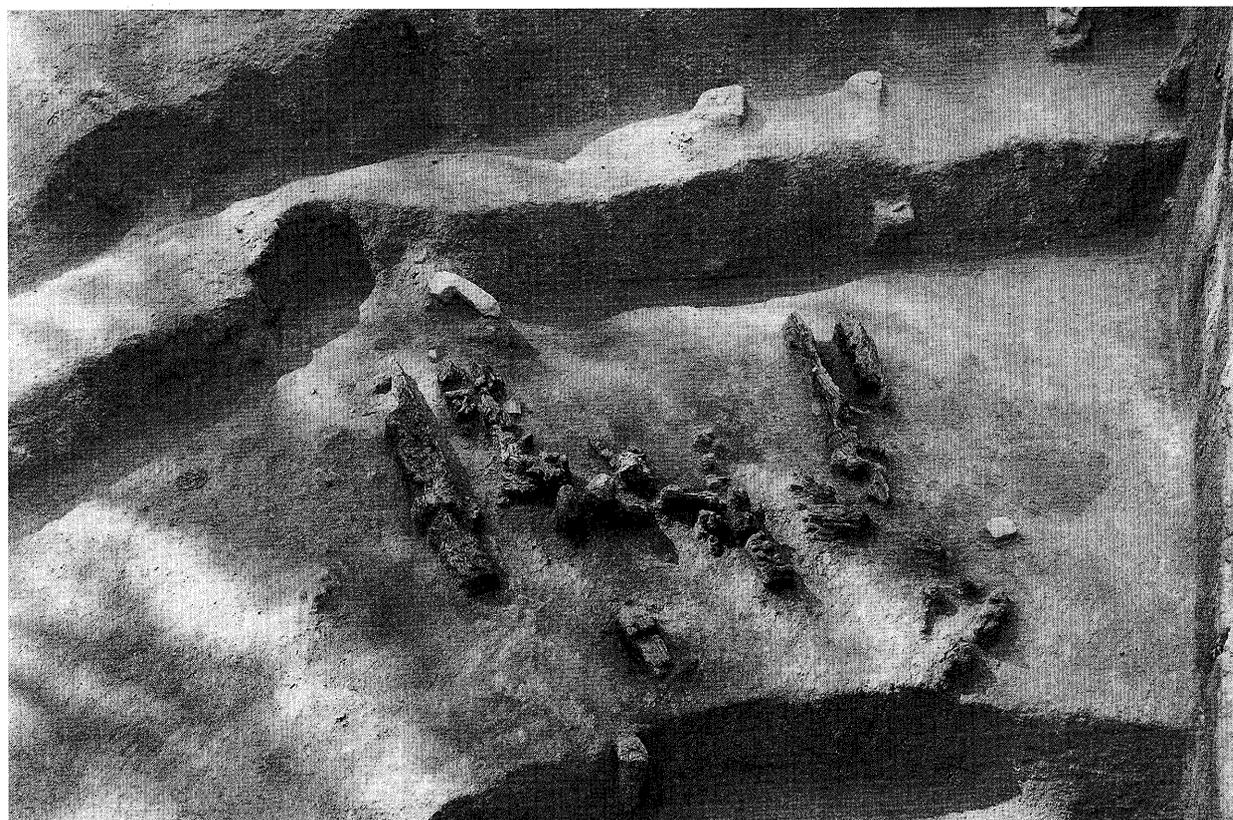
a. SH3内土器・炭化材出土状況（北から）



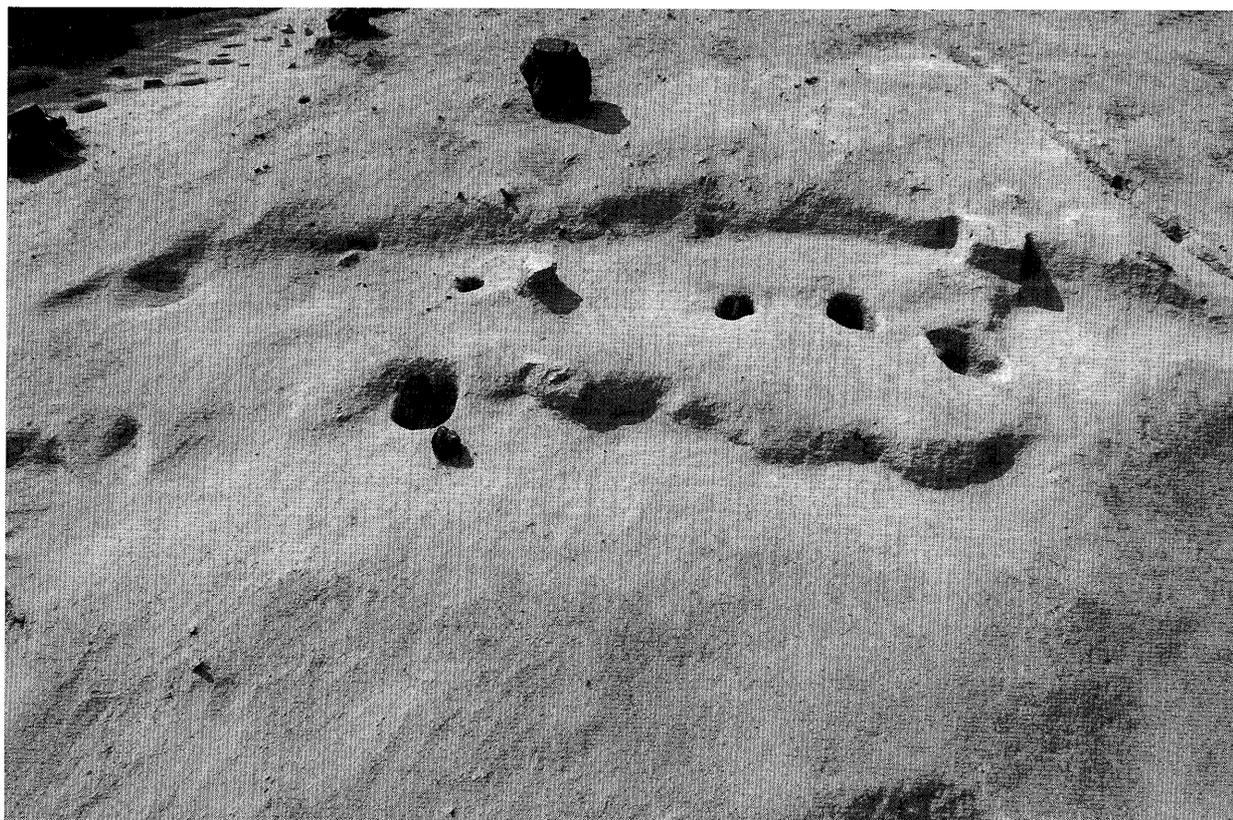
b. SH3内土器群出土状況（西から）



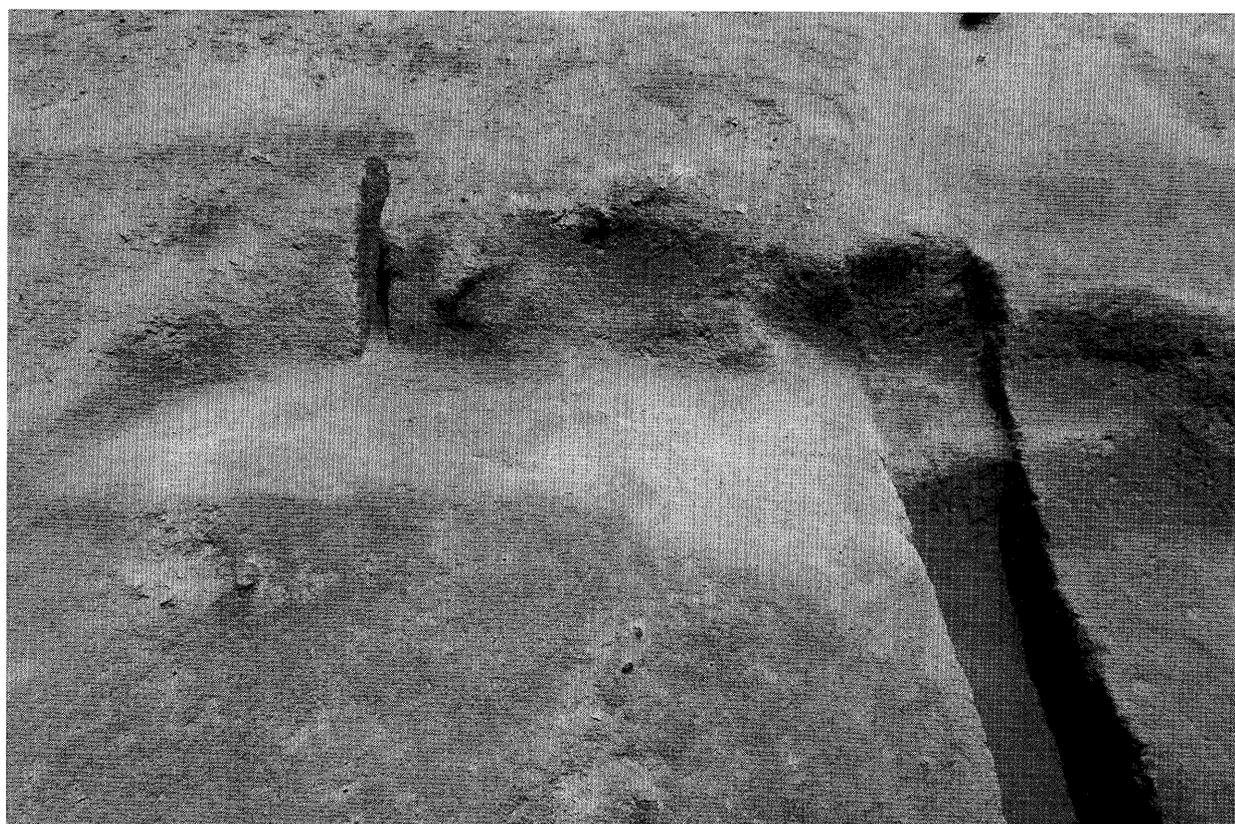
a. SH4・5 (南から)



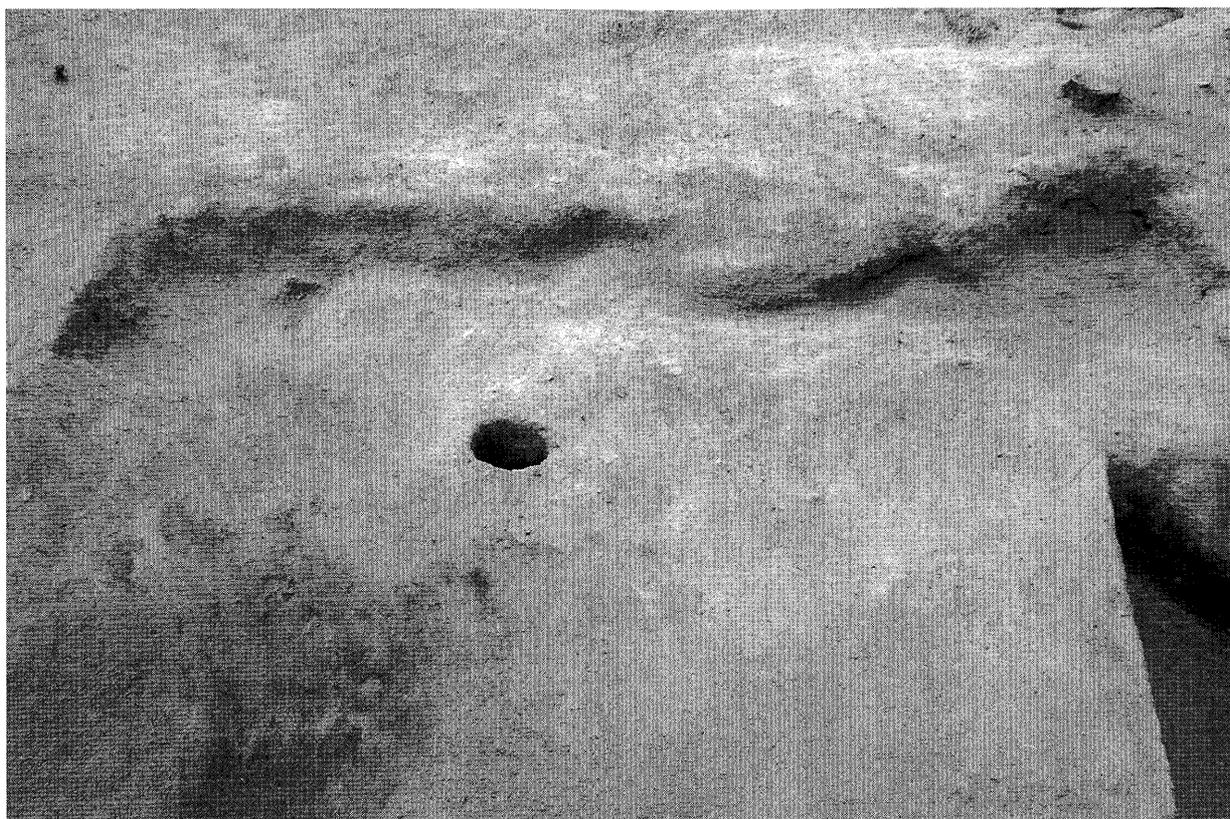
b. SH4内炭化材出土状況 (南から)



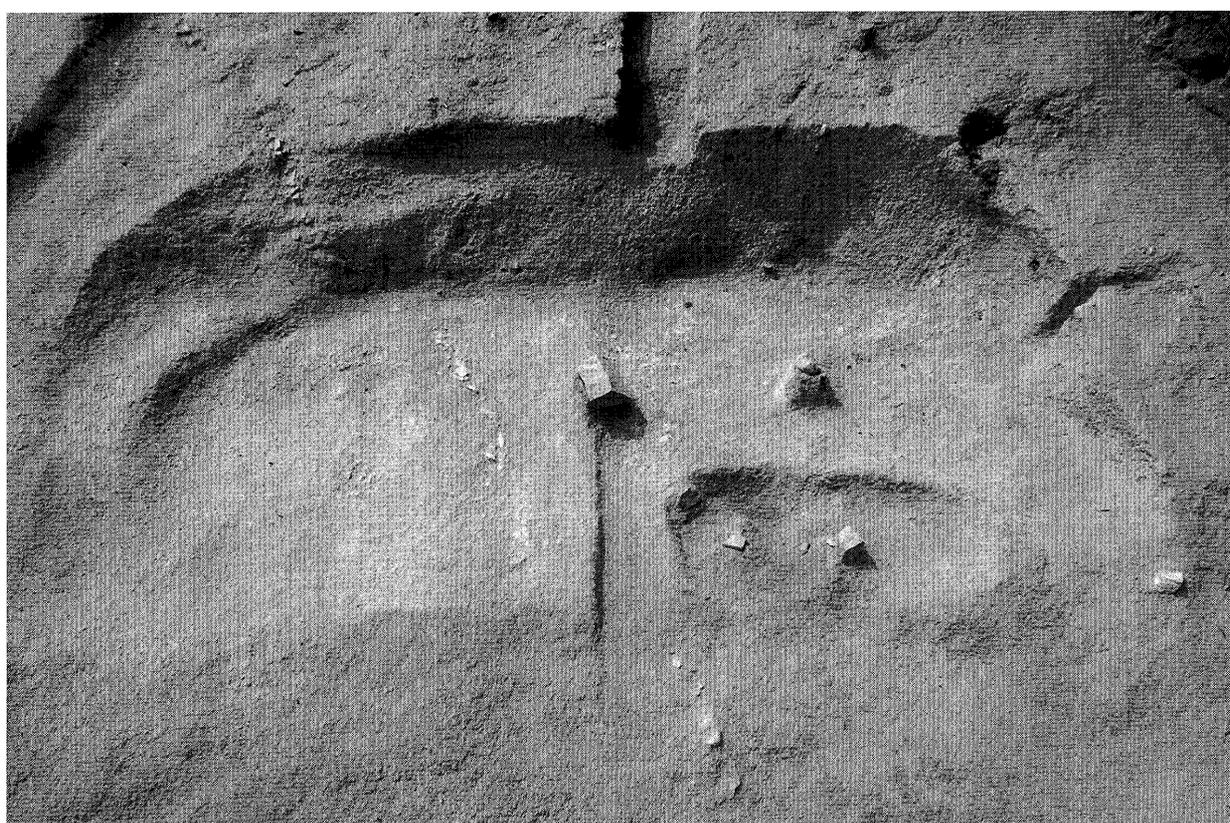
a. SX 1 (南から)



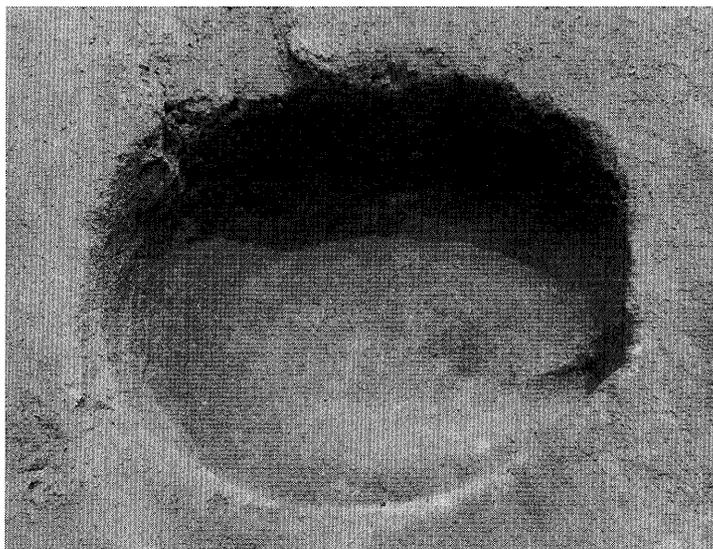
b. SX 2 (西から)



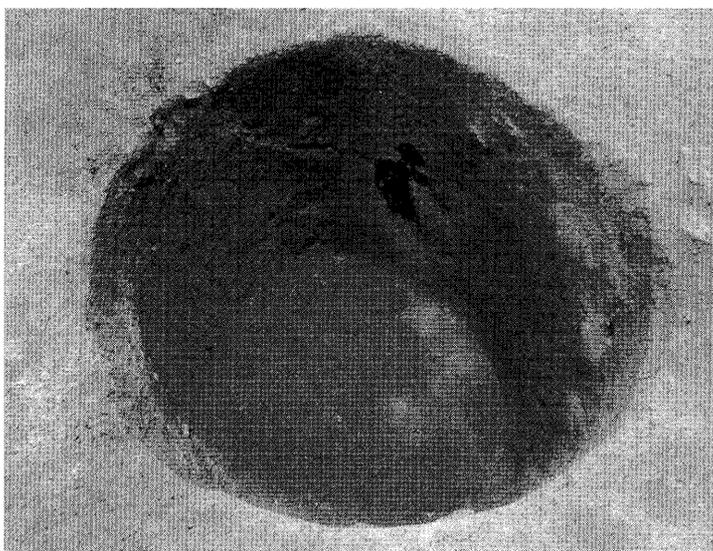
a. SX3 (東から)



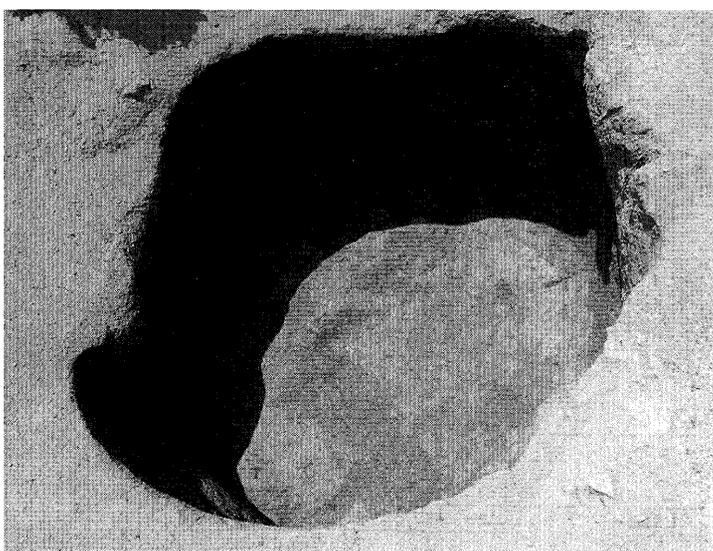
b. SX4 (東から)



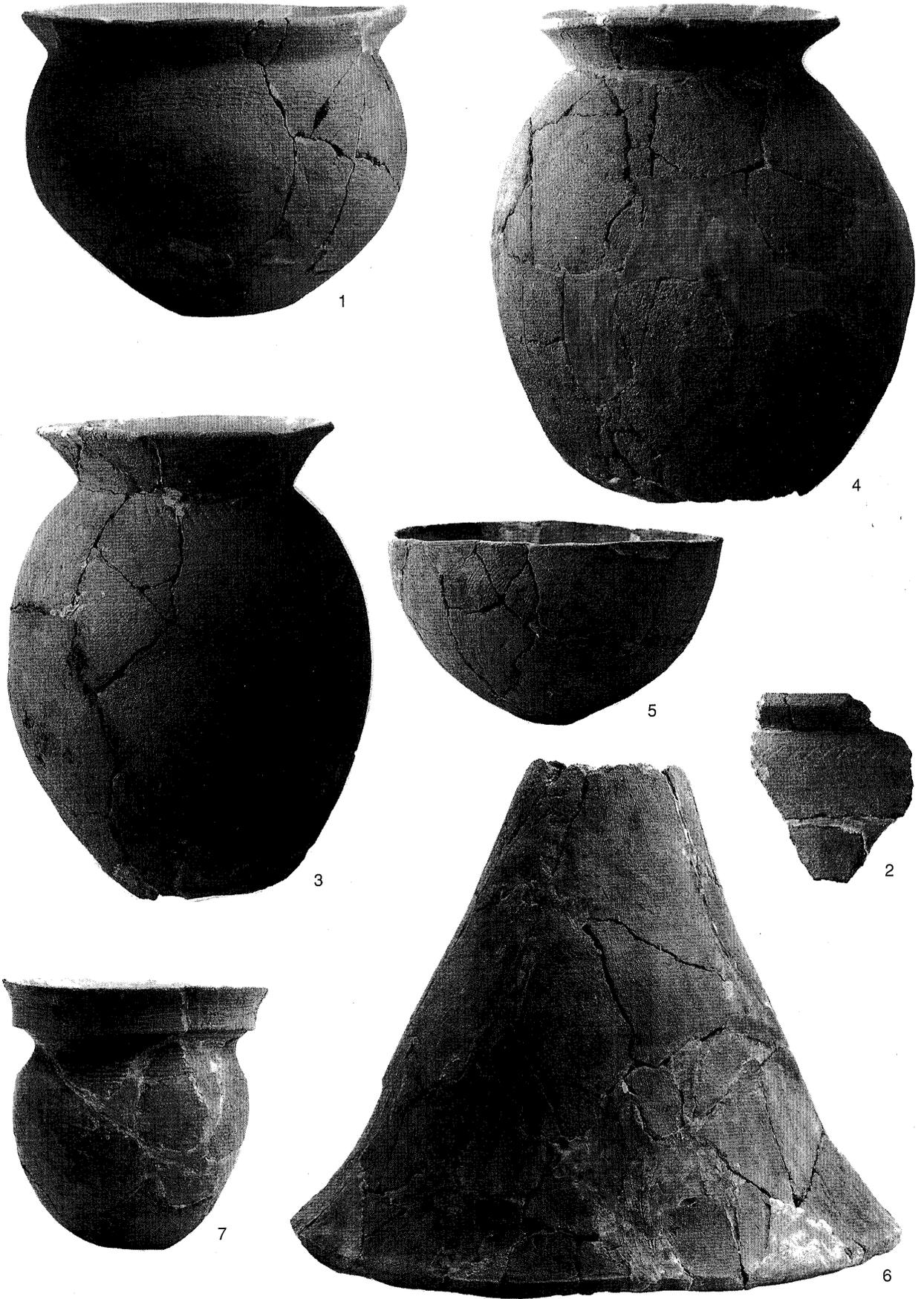
a. SK 1 (西から)



b. SK 2 (南から)



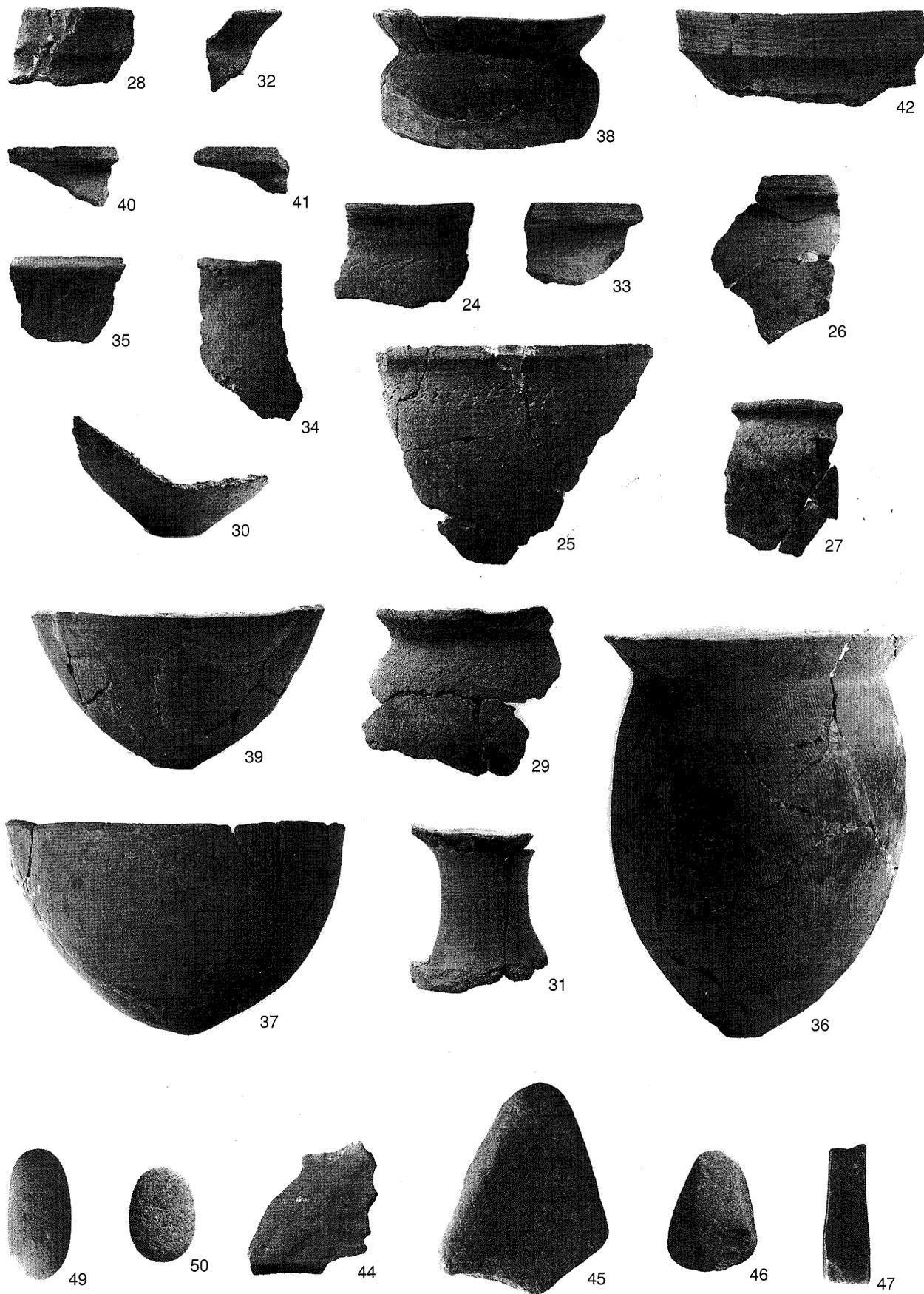
c. SK 3 (東から)



鯛之迫遺跡出土遺物(1)



網之迫遺跡出土遺物(2)



鯛之迫遺跡出土遺物(3)



48



43



51



52



53

報告書抄録

ふりがな	たいのさこいせき -ひろしましあさみなみくやすひがししょざい-							
書名	鯛之迫遺跡 -広島市安佐南区安東所在-							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財) 広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	山脇一幸							
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町4番17号 アステールプラザ内							
発行年月日	西暦2001年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
たいのさこいせき 鯛之迫遺跡	ひろしまけんひろしましあさみなみく 広島県広島市安佐南区 やすひがしろくちょうめ 安東六丁目	34106	—	34° 28' 65"	132° 27' 34"	20000427 } 20000721	1500m ²	安田女子大学 用地造成工事 に係る埋蔵文 化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鯛之迫遺跡	集落	弥生時代	住居跡5軒 テラス状遺構 4ヶ所 土坑3基	弥生土器 石器 鉄器 青銅器	焼失住居2軒			

財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第7集

鯛 之 迫 遺 跡

—広島市安佐南区安東所在—

2001年3月

編集発行 財団法人広島市文化財団

広島市中区加古町4番17号 TEL (082) 248-0427

印刷 産興株式会社

広島市中区舟入南一丁目1-18